

大学新入生における適応状況と適応過程(V)*

——入試制度改訂後における7月から2月

に至る適応過程の予測因——

保健管理センター講師

豊 嶋 秋 彦

教 養 部

保健管理センター非常勤講師

芳 野 晴 男¹

清 俊 夫²

I 問 題

II 対象と方法

III 結果・考察

- III-1 7月時適応群における2月時総括的適応感の予測因
- III-2 7月時中間的適応群における2月時総括的適応感の予測因
- III-3 7月時非適応群における2月時総括的適応感の予測因
- III-4 7月時における反応・生活空間領域の予測性に関する横断的分析

IV 総括と展望

付-資料；7月調査質問紙

I 問 題

我々は社会心理学的な仮説枠組から構成した質問紙によって、昭和52年以来、大学新入生の主要な生活領域・生活空間における人格適応感の状況の1年間に亘る追跡調査を実施し、さらに、昭和55年より4年次学生への調査¹⁾、昭和55年度入学生に対しては1年次から4年次に至る長期的な追跡をも試みてきた。とりわけ1年次学生を対象として、入学時及び7月時（夏期休暇直前）調査への反応と、2月（1年次終了）時の総括的適応感との関連を検討したⅡ報（豊嶋ほか1980）・Ⅳ報（同1982a）の分析からは、ある調査時点（ t_x ）における多くの生活（空間）領域について、それへの関与や評価の仕方・当該領域の自我中核一周辺性が、後の調査時点（ t_{x+n} ）の総括的適応感に

* 本論の一部は日本心理学会第45回大会（芳野・清・豊嶋 1981）、第20回全国大学保健管理研究集会東北地方研究集会（豊嶋 1982a）で発表された。

1 教養部助教授（心理学）

2 教育学部助教授（発達心理学教室）

対してプラスあるいはマイナスの影響を与えると示唆され、しかも、 t_x における総括的適応感の水準が異なると異なる影響を及ぼすことが示された。しかし、特に五段階評定項目では、各時点での反応はその時点の総括的適応感との間に有意な正の相関係数が見出されるものが殆んどであり、有意な負の相関係数が認められるものは皆無である（豊嶋 1980, 1982 b）。

これらは、学生相談という実践活動にとって学生の人格適応の向上のための焦点領域が見出された事を意味するが、とりわけ、長期的観点に立つと、全ての学生に望まれるような生活体制や生活空間体制は見出しにくく、少なくともその時点での総括的適応感の水準に応じて異なる体制が必要となることを示唆している。

今回はⅣ報にひきつづき1年次学生の総括的適応感の予測因を探索するという視点から、これまでとに残されてきた1年次7月から2月に至る適応過程をとりあげ、2月時の総括的適応感に予測的関連性をもつ7月時点の要因をさぐる。

目的 1. 7月時点で同段階の総括的適応感を示す者が2月時でその段階を維持するか、あるいは他の段階に移行（改善又は悪化）するか、に関連する7月時点での要因を探索すること。

1-① どの段階までの移行かを無視した場合の、維持—移行一般の関連要因の探索。

1-② 維持かどの段階までの移行かの関連要因の探索。

目的 2. 7月時に同段階の総括的適応感を示す者が、2月時に適応的段階に移行（適応化）又は非適応的段階に移行（非適応化）する事に関連する7月時点での要因を探索すること。

なお、「総括的適応感」とは、入学（決定）から調査時点に至る学生生活を空間的かつ時間的に全体として展望させた結果あらわれる全体的な人格適応感であり、具体的には、「これまでの学生生活がうまくいっているかどうか」という、生活の順調感、もしくは＜円滑な展開＞感を問う設問（五段階評定項目）への反応が指標とされ、以下 SA（summarized adjustment feeling）と略記される。また、この一連の調査研究においてとられた理論的枠組と適応概念に関しては、Ⅱ報（1980）、Ⅲ報（1981）を参照されたい²⁾。

Ⅱ 対象と方法

対象：弘前大学全学部の新入生（昭和54年度）（1040名）中、教養課程心理学講義の出席者に年間3回（S54年4月・7月・S55年2月）実施した質問紙調査から、7月時調査と2月時調査で共に有効資料をえた380名（入学者の36.5%）の7月時調査における反応を分析対象とする。対象者は7月時SAと2月時SAの段階（A・適応的、B・中間的、C・非適応的）³⁾によって9群に分けられる（表1）。7月時SA段階が同じである三群（ $G_1 \cdot G_2 \cdot G_3$ 、 $G_4 \cdot G_5 \cdot G_6$ 、 $G_7 \cdot G_8 \cdot G_9$ ）は、以下それぞれ、 $G_1 \sim G_3$ 、 $G_4 \sim G_6$ 、 $G_7 \sim G_9$ と略記される。

質問紙：7月時調査質問紙は付資料の通りであるが、①入学後現在までの学生生活のフォーマル・インフォーマルな生活諸領域・生活空間領域への関与度やそこでの適応感についての回顧的評価、②強い自我関与のある活動（「最も力を入れていること」）、自我中核的な（「かけがえのない」）活動や準拠集団など基軸的生活空間領域の内容、③所属への満足感、④生活空間諸領域の統合原理としての人生観・人生指針、⑤SA及びその関連指標（人生観に照らした生活の納得感、生きがい・充実感）、⑥今後の教養部生活への動機づけや展望、など心理学的過去・現在・未来の内容や評価を求めている。項目数は五段階評定28項目（うち1つはSA）、選択式7項目、自

表 1 対象者の群構成

		7 月 時 S A			計 (%)
		A・適応	B・中間	C・非適応	
2月時 S A	A・適応	G ₁ 95 (52.2)	G ₄ 27 (19.0)	G ₇ 11 (19.6)	133 (35.0)
	B・中間	G ₂ 70 (38.5)	G ₅ 85 (59.9)	G ₈ 24 (42.9)	179 (41.1)
	C・非適応	G ₃ 17 (9.3)	G ₆ 30 (21.1)	G ₉ 21 (37.5)	68 (17.9)
計 (%)		182(100.0)	142(100.0)	56(100.0)	380(100.0)

表 2 五段階評定項目一覧

項目番号	領 域 ・ 項 目 名		質問紙 項 目 番 号
1	所 属 満足感	大 学	1-1
2		学 部	1-2
3		学科（課程）	1-3
4		転学(部科)志向の弱さ	2
5	地 域 満 足 感		3
6	4 講 義 と の 関 係 }	魅力度	4-1
7		ついていける	4-2
8		出席数	4-3
9		専門準備度	4-4
10	7 月	対教官交流度	4-5
11	へ の 回 顧	サークル関与度	5-1
12		友 人	友人数
13		関 係	適応感
14		下 宿	適応感
15	・ 寮	交流度	6-2
16		対 家 族	適応度
17		交流度	7-2
18	生 き 方 人生指針	考える時間	8-1
19		確立感	8-2
20		生活の納得感	8-3
21	生 ぎ が い 充 実 感		14
22	3月までの 展望	学業への意欲	16-1
23		出席意欲	16-2
24		サークル関与意欲	16-3
25		交友への意欲	16-4
26		力を入れたい事の実現見込	17-付
27		全体的適応予想	18
総 括 的 適 応 感 (S A)			15-1

由記述14項目の計49である。うち五段階評定項目の名称を表2に示す。

なお、「友人の質」(付-資料, 項目番号5-2付)のみ名古屋大学の留年生調査の質問紙(土川ほか1978)に依拠して作成された。

分析手続: 7月時SAが同段階である者(G₁~G₃・G₄~G₆・G₇~G₉)について, 7月時の反応の群間比較がなされる。比較は五段階評定項目では否定的反応ほど高得点として1~5点を割当て, その平均値のt検定, その他の項目では各カテゴリーとそれ以外のカテゴリーの度数の χ^2 検定(df=1_o)による⁴⁾。但し, 目的2では χ^2_2 検定も使用。有意水準10%で傾向差ありと見做す。

目的1の分析: G₁~G₃とG₇~G₉では, 7月時SAを維持する群(G₁, G₇)とそれ以外の者(G₂+G₃, G₇+G₉)との比較によってSAの維持-変動(G₁~G₃では悪化, G₇~G₉では改善)一般の予測因が探られる。このうち, G₁~G₃ではG₁・G₂間とG₁・G₃間の双方で, G₇~G₉ではG₇・G₉間とG₈・G₉間の双方で, 同方向の差が認められる反応が『鋭い予測因』と呼ばれる(目的1-①)。次に, G₁~G₃, G₄~G₆, G₇~G₉の各クラスター内部で7月時SAの維持群(G₁, G₅, G₉)とその他の群の間で個々に比較を行なう(目的1-②)。

目的2の分析: 2月時にSAがAに移行する「適応」化の要因と, Cに移行する「非適応」化の要因を, 次の2つの規準によって探る⁵⁾。

a. A又はCへの移行をみた群(G₃, G₄, G₆, G₇)とそれ以外の者(G₁+G₂, G₅+G₈, G₄+G₆, G₃+G₉)との間で差の認めうる反応。

b. 群番号の増大に伴い平均又は比率に漸増(減)が観察される反応。平均については, 便宜的に次の規準で拾っ

ていく：即ち、 $G_1 \sim G_3$, $G_4 \sim G_6$, $G_7 \sim G_9$ それぞれの内部で、両端の群間 (G_1 と G_3 , G_4 と G_6 , G_7 と G_9) に差が認められ、かつ、標本レベルでの漸増（減）が観察されること。比率については、まず傾向検定 (χ^2_2 検定・Bartholomew 法、両側) によって増大・減少傾向が見出される反応を拾い⁶⁾、更に、両端の群間に差が認められ、かつ、標本レベルでの漸増（減）がある反応も拾っていく⁷⁾。

結果の記述法：比較結果は傾向差以上の認められる項目・反応のみが表示される。また、SAの維持・変動の予測因の探索にさいしては、比較対の先の群（2月時SAがより適応的な群）の特徴が、SAの悪化阻止、又は改善の要因として述べられる。従って、記述の内容・方向性を逆にすれば、比較対の後の群の特徴になる。

Ⅲ 結果・考察

Ⅲ-1～Ⅲ-3では、 $G_1 \sim G_3$, $G_4 \sim G_6$, $G_7 \sim G_9$ のそれぞれについて、差・連関・漸増（減）の見出される項目・反応を拾い、SAの改善・維持・悪化及び適応・非適応化に関連する生活空間体制とその2月時SAへの機能とが考察される。Ⅲ-4では、7月時SA段階のちがいを越えて2月時SAに予測的関連の認められる項目・反応、及び生活空間領域が探索され、その2月時SAへの機能が考察される。

Ⅲ-1. 7月時適応群における2月時総括的適応感の予測因

7月時SAがA（「適応的」）である $G_1 \sim G_3$ について、2月時SAに予測的関連をもつと思われる7月時の反応を求め、2月時SAに関連する生活空間体制とそのSAに対する機能とを考察していく。表3・表4に $G_1 \sim G_3$ での比較結果を一括して示した。

(1) SAの維持・悪化一般の予測因

表3・4の「 $G_1 : G_2 + G_3$ 」列から、14の五段階評定項目への反応と、五段階評定以外の項目に対する9反応及び2合成カテゴリーとが、2月時に至るSAの維持・悪化一般に関連することが知られる。これらのうち「転学（部・科）志向の弱さ」「サークルへの関与度」「下宿・寮での交流度」「生きがい・充実感」、五段階評定以外の項目で、「やりたくなかったのにやらざるをえなかった事」としての「出席」、SA・Aの理由として「不満がないから」という消極的理由を記述することの、計6反応は、 $G_1 : G_2$ と $G_1 : G_3$ の双方でも同方向で差が認められ、SA・Aが維持されるか悪化するかの鋭い予測因となっている。

これら項目・反応によって指示される生活（空間）領域の類似性・共通性にそって、以上の比較結果を整理し考察を加えると、SA・Aの維持、即ちB～Cへの悪化一般の阻止に関連する7月時における特徴的な生活空間体制とそのSAに対する機能を次の10項にまとめることができよう。

①「大学」「学部」への「満足感」「転学（部・科）志向の弱さ」「地域満足感」の比較結果から、所属と地域へのより強い満足感と受容、特に＜弘前＞大学に入学したことへの満足感。② G_1 で、4月～7月の自我関与的活動が「なし」及び「なし＋無答」が少なく、「生きがい・充実感」が強い等から、強い自我関与のある活動の展開とそれによる自我支持感・充実感。その活動に7月以降も「力を入れたい」とする場合は後述⑨項が関わってこようが、7月までに＜飯の＞ではあれアイ

デンティティーが見出せていることが後のSAにプラスの影響を与えるものと思われる。③G₁に、7月時最大の自我関与的活動として「学業」をあげる者が多く、「やりたくなかったがやらざるをえなかった事」に「出席」をあげる者が少ない等から、学業への自我関与、但し、出席に強い負担感や拘束感をもたぬこと。これは大学における学業～講義に関する規範の受容とそれによる社会（文化）適応感として括られよう。④G₁で「サークル関与度」が強く、今後の「関与意欲」も強く、サークル参加者が多く、自我中核的な準拠集団及び活動の双方とも「サークル」を選ぶ者が多い等から、サークル集団及び活動の自我中核的定位とそれによる自我支持。⑤「友人数」「友人関係での適応感」「下宿・寮での交流度」より、多くの友人との密で円滑な交流による自我支持。⑥「対家族交流度」より、家族との密な関係とそれによる自我支持。⑦G₁で「アパート+間借り」居住者が少なく、アパート・間借り以外（但し後節(3)・(4)で見るとに寮居住者は非適応化しやすいから寮を除く）、即ち、自宅・下宿寮居住による他律的な生活規制の存在とそれとの間の適応。⑧「人生指針確立感」「人生指針に照らした生活の納得感」「生きがい・充実感」から、より確立的な人生針指と、それに基く生活展開と充実感・納得感。⑨「力を入れたい事の実現見込」で2月時SAに対する逆機能的関連性が見出されているから、今後の自我関与を展望している目標活動の実現に、過大な期待をもたぬこと。⑩G₁にSA・Aの理由として「全般的なプラス感情」を記述する者が多く、「不満・悩みなし」と記述する者が少ない等から、全般的、即ち、生活空間諸領域を広くおおむね積極的 positive なプラス感情を伴うSA・Aであり、消極的理由ではないこと。消極的理由の場合、その後の生活で不満や悩みを感じる生活領域があらわれればSA・Aの主観的理由が消失してしまい、そこで生活空間体制の再編に迫られたり、葛藤が意識化されやすいために、SA・Aを維持しにくいものと考えられる。

なお、以上10項のうち、③は、G₁・G₂比較とG₁・G₃比較の双方においても成立し、SA・Aの悪化阻止に広く関連する特徴であるといえ、さらに、①②⑥⑨⑩はG₁・G₂比較でも成立する、Bへの悪化阻止に強く関連する特徴といえる。

(2) SAの維持—中間的適応度への悪化の予測因

G₁とG₂を分化でき、SA・Aの維持か、悪化するとすればB（「中間的適応度」）まで悪化しやすいか、に予測的関連をもつ反応としては、五段階評定項目では13反応（表3）、それ以外の項目では7反応と1合成カテゴリー（表4）が見出された。その多くは、前節で指摘された維持—悪化一般の予測因と重なっているが、「友人数」「対友人適応感」、居住形態としての「アパート+間借り」、4～7月の自我関与的活動が「なし」、7月時の自我中核的活動としての「サークル」の計4反応1合成カテゴリーでは、G₁：G₂+G₃では見出されていた差がG₁：G₂では認められない。また「人生指針を考える時間」では、G₁：G₂+G₃で見出されなかった差がG₁：G₂で新たに見出されている。

以上から、SA・Aの維持、即ちSA・Bへの悪化阻止に関連する特徴的な生活空間体制とそのSAに対する機能は、次の9項に整理できよう。そのうち①～⑥は、G₁：G₂+G₃比較でえられた特徴と全く重なるので、考察の根拠とした、差をもつ反応の列挙は省略してある。①所属・地域への高い満足感と受容、特に＜弘前＞大学に在ることへの満足感。②強い自我関与のある活動の展開

表 3 7月時 SA・A (G₁~G₃) 群における2月時

項目番号	項 目		G ₁ +G ₂			G ₁			G ₂			G ₃		
			n	\overline{x}	S D	n	\overline{x}	S D	n	\overline{x}	S D	n	\overline{x}	S D
1	所 属 大 学 満足感	学 部	164	2.20	.79	95	2.05	.82	69	2.45	.70	17	2.24	.75
2		学 部	165	2.18	.88	95	2.06	.92	70	2.33	.79	17	2.41	.80
4		転学(学科)志向	165	1.67	.99	95	1.53	.97	70	1.87	.99	17	2.00	1.28
5	地 域 満 足 感		165	2.49	1.11	95	2.33	1.05	70	2.71	.94	17	2.35	1.00
9	専 門 準 備 度		164	4.10	1.01	94	4.14	1.02	70	4.06	.99	16	4.56	.89
11	サークル関与度		103	1.92	1.23	64	1.72	1.11	39	2.26	1.37	12	2.50	1.31
12	友 人 友 人 数 関 係 適 応 感	友 人 数	159	2.24	.73	91	2.08	.75	68	2.46	.66	17	2.35	.86
13		適 応 感	163	1.94	.66	94	1.85	.70	69	2.00	.59	17	2.12	.60
15	下宿・寮での交流度		116	2.26	1.09	64	2.08	1.04	52	2.48	1.11	13	2.85	1.28
17	対 家 族 交 流 度		143	2.31	1.04	81	2.15	1.03	62	2.52	1.02	16	2.50	.73
18	生き方 考える時間 人 生 確 立 感 指 針 生活の納得感	考える時間	164	2.65	1.09	94	2.50	1.13	70	2.86	1.00	17	2.29	1.11
19		確 立 感	162	3.05	1.12	93	2.86	1.10	69	3.30	1.10	17	2.49	1.25
20		生活の納得感	110	2.98	.93	70	2.84	.94	40	3.23	.86	12	3.00	.85
21	生きがい・充実感		165	2.32	.75	95	2.14	.77	70	2.57	.65	17	2.59	.94
24	サークル関与意欲		161	2.25	1.22	95	2.10	1.19	66	2.47	1.23	17	2.47	1.13
26	力を入れたい事の 実 現 見 込		137	2.03	.87	81	2.15	.98	56	1.86	.65	15	1.87	.64
総括的適応感 (SA)			165	1.96	.20	95	1.95	.22	70	1.97	.17	17	2.00	.00

注) 1. 「比較」欄; マイナスは、より肯定的反応ほど2月時SAが否定的となる逆機能的関連。数値はt
2. 「漸増・減」欄; プラスは G₁ から G₃ にかけての平均値漸増、即ちより肯定的反応ほど2月時SAが

とそれによる自我支持・充実感。③学業への強い自我関与、出席に強い負担感・拘束感をもたないこと。④家族との密な関わりとそれによる自我支持。⑤目標活動の実現に過大な期待をもたぬこと。⑥全般的な積極的プラス感情を伴うSA・Aであり、消極的理由によるSA・Aでないこと。⑦「下宿・寮での交流度」「対家族交流度」より、居住先での密な人間関係とそれによる自我支持。⑧ G₁ でサークル参加者が多く「サークル関与度」「関与意欲」も強く、自我中核的準拠集団として「サークル」をあげる者が多い等から、サークルへの強い関与及び関与意欲とサークル集団からの自我支持。⑨人生指針に関する五段階評定の3項目と「生きがい・充実感」より、人生指針探索への強い関心と確立過程の進行、それに基く生活の展開。

なお、「人生指針を考える時間の多少」は、G₁よりもG₂で少なく、G₂よりもG₃で多くなり、人生指針探索への関心と関与が強いほど2月SAがAを維持するか、あるいはCに悪化しやすいという両極化傾向が認められる。7月までの模索の結果ある程度の「確立」がみられたり、そこで見出された「指針」に沿って7月以降の生活が展開される場合、2月時SAはAを維持しやすく、そうでない場合にはCに悪化しやすいのであろう。それに対して、7月までの人生指針模索があまりなされない場合は、2月時SAはBに悪化しやすいもののCまでの悪化はもたらされにくいものと

SA の予測因 一五段階評定項目一

G ₂ +G ₃			比 較 ¹					
			維持一悪化要因			G ₂ :G ₃	非適応化要因	
			G ₁ :G ₂₊₃	G ₁ :G ₂	G ₁ :G ₃		G ₁₊₂ :G ₃	漸増・減 ²
86	2.41	.71	3.08**	3.24**				
87	2.35	.79	2.19*	1.93°				
87	1.90	1.05	2.47*	2.23*	1.75°			+
87	2.64	.95	2.12*	2.45*				
86	4.15	.99				1.85°	1.75°	
51	2.31	1.35	2.58*	2.16*	2.15*			+
85	2.44	.70	3.26**	3.31*				
86	2.02	.59	1.76°					
65	2.55	1.15	2.45*	1.99*	2.29*		1.80°	+
78	2.51	.96	2.29*	2.12*				
87	2.75	1.04		2.09*		-2.02*		
86	3.22	1.13	2.22*	2.52*				
52	3.17	.86	1.97°	2.09*				
87	2.58	.71	3.97**	3.81**	2.14*			+
83	2.47	1.20	2.08*	1.93°				
71	1.86	.64	-2.17*	-2.09*				
87	1.98	.15		2.66**	2.29*			+

値。°P<.10, *<.05, **<.01。

肯定的になることを示す。

解される。

(3) SA の維持一非適応への悪化の予測因

G₁ と G₃ を分化でき、SA・Aの維持か、悪化するとすればC（「非適応」）まで悪化しやすいかに予測的関連をもつ反応としては、五段階評定項目では4反応（表3）、五段階評定以外の項目では6反応（表4）の計10反応がえられる。このうち6反応が G₁:G₂+G₃ で差が見出された維持一悪化一般の予測因と重なっているが、全体的には重なりは少ないと言えよう。

以上からSA・Aの維持、即ちSA・Cへの悪化阻止に関連する特徴的な生活空間体制とそのSAに対する機能は次の7項にまとめることができよう。なお、①は、G₁:G₂+G₃, G₁:G₂ 比較で見出された特徴と全く同じである。①学業への強い自我関与、但し出席に強い負担感や拘束感をもたないこと。②「転学（部・科）志向の弱さ」から、所属・地域への満足感の強弱は問わず現所属を受容できていること。③「生きがい・充実感」より、強い生きがい・充実感。④「サークル関与度」から、サークルへの強い関与。⑤G₁で「下宿」居住者が多く、「下宿・寮での交流度」も密なことから、下宿・寮での密な交流と下宿生活の享受。但し、「寮」居住者ではG₃が多くなるから、密な人間関係から自我受傷したり、寮生活で生じ易いトラブルによって<順調>な生活が崩

表 4 7月時 SA・A (G₁~G₃) 群における 2月時SAの予測因

項 目 ・ 反 応 ¹		G ₁ +G ₂	G ₁	G ₂	G ₃	G ₂ +G ₃
		n=165	n=95	n=70	n=17	n=87
居 住 形 態	(アパート+間借) 下 宿 寮	25(15.2%) 68(41.2) 27(16.4)	11(11.6) 42(44.2) 16(16.8)	14(20.0) 26(37.1) 11(15.7)	4(23.5) 3(17.7) 6(35.3)	18(20.7) 29(33.3) 17(19.5)
サークル参加	や っ て い る や っ て い な い	100(60.6) 65(39.4)	64(67.4) 31(32.6)	36(51.4) 34(48.6)	12(70.6) 5(29.4)	48(55.2) 39(44.8)
自我関与的活動 (4~7月)	人 生 観・読 書 な (なし+無答)	9 (5.5) 12 (7.3) 33(20.0)	4 (4.2) 4 (4.2) 5 (5.3)	5 (7.1) 8(11.4) 11(15.7)	4(23.5) 3(17.7) 3(17.7)	9(10.3) 11(12.6) 14(16.1)
やらざるをえなかった事	出 席	6 (3.6)	1 (1.1)	5 (7.1)	2(11.8)	7 (8.1)
自我関与的活動 (7月)	学 業 人 生 観・読 書	12 (7.3) 8 (4.8)	11(11.6) 5 (5.3)	1 (1.4) 3 (4.3)	0 (0) 5(29.4)	1 (1.2) 8 (9.2)
自我中核的準拠集団	サークル	15 (9.1)	13(13.7)	2 (2.9)	1 (5.9)	3 (3.5)
自我中核的活動	サークル	23(13.9)	16(16.8)	7(10.0)	0 (0)	7 (8.1)
SA・Aの理由 (自由記述)	プ ラ ス 感 情 不 満・悩 み な し	50(30.3) 27(16.4)	34(35.8) 11(11.6)	16(22.9) 16(22.9)	4(23.5) 7(41.2)	20(23.0) 23(26.4)

注) 1. (+) は合成カテゴリー。

2. 「比較」欄; 数値は χ^2 値。「傾向」欄を除き $df=1$. $\circ P<.10$, $*P<.05$, $**P<.01$.
不等号は比較対の前後の大小関係を示す。例えば「G₁: G₂」列の>はG₁>G₂。

3. 「傾向」欄; 数値は $\bar{\chi}_2^2$ 値 ($-\rho_{12}=.34$)。>は減少傾向, <は増大傾向。

れる事を通して、寮生のSAは悪化し易いのかかもしれない。⑥7月までの最大の自我関与的活動においても、7月現在の最大の自我関与的活動においても、ともに「人生観探究・読書」を記述する者がG₁に少ないことから、人生観探究や読書への強い自我関与がないこと。強い関与がある場合、人生観や自己観の危機にみまわれ易く、そのためにSA・Aが維持されにくいものと解される。⑦G₁でSA・Aの理由として「不満・悩みなし」を記述する者が少ないことから、消極的理由によるSA・Aでない事。

(4) SA・Aからの非適応化要因

G₁+G₂とG₃を分化できる反応は、五段階評定項目で2反応(表3)、その他の項目で4反応(表6)の計6反応である。これに加えて、G₁からG₃での漸増・漸減がみられる反応として、五段階評定項目では「転学(部・科)志向の弱さ」「サークル関与度」「生きがい・充実感」で平均値の漸増、その他の項目では表4の通り、7反応と1合成カテゴリーで増大又は減少が認められた。

これから、7月時のSA・Aから2月時にCへ非適応化することに関連する生活空間体制とそのSAに対する機能は、次の6項にまとめよう。①「転学(部・科)志向の弱さ」から、現所属に在ることを受容できないこと。②4~7月の自我関与的活動が「なし」と「なし+無答」がG₁からG₃で漸増し、「生きがい・充実感」もG₁からG₃にかけ次第に弱まっていることから、7月までに強い自我関与を伴う活動をもたないか、明確にできないことと、それに伴う弱い充実

比			較 ²		
維持－悪化要因			G ₂ : G ₃	非適応化要因	
G ₁ : G ₂₊₃	G ₁ : G ₂	G ₁ : G ₃		G ₁₊₂ : G ₃	傾 向 ³
< 2.81°		> 3.20° < 3.11°	< 3.34°	< 3.71°	> 4.43°
> 2.85° < 2.85°	> 4.29* < 4.29*				
< 3.29° < 4.60*	< 3.91*	< 5.46*		< 5.11*	< 8.11* < 4.97° < 5.75*
< 3.75°	< 2.71°	< 2.90°			< 5.98*
> 6.42*	> 4.74*	< 7.59**	< 7.55**	<10.56**	> 8.07*
> 4.73*	> 4.48*				
> 3.18°					> 4.42°
> 3.57* < 6.60*	> 3.19° < 3.75°	< 9.37**		< 6.25*	< 9.62**

感。7月までにアイデンティティー確立への模索が不十分である事を示唆し、それがその後のSAにマイナスの機能を果すのであろう。③4～7月においても7月時現在においても、「人生観探究・読書」を最大の自我関与的活動とする者がG₃に多いことから、人生指針探索や読書への過度の自我関与。但し五段階評定項目の人生指針に関する3項目では差も漸増（減）も見出せないから、探索それ自体が非適応化要因ではなく、過度の・強い関与が非適応化要因になると見做しうる。④G₁～G₃で、7月時現在の最大の自我関与的活動を「学業」とする者が漸減し、「やりたくなかった事」に「出席」をあげる者が漸増、「専門準備」度も弱まることから、学業・出席への消極的構え。この構えが2月までの学業遂行に否定的機能を果したり、大学社会における社会（文化）非適応感を生じさせ易いために、非適応化しやすいものと思われる。⑤「サークル関与」度がG₁からG₃にかけて弱まり、自我中核的活動を「サークル」とする者もG₁からG₃で漸減するから、サークルへの弱い関与・自我周辺性。⑥G₁からG₃で「下宿」居住者が減少傾向を見せ、「下宿・寮での交流度」も弱まるから、下宿・寮での疎な人間関係と下宿生活を享受できないこと。但し「寮生」は逆にG₃で多くなる。寮生の場合は、前節⑤項でのべた機制を通して非適応化が生じる事も多いのであろう。⑦SA・Aの理由としての「不満・悩みなし」がG₃で多く、消極的理由に基くSA・Aであること（この場合の非適応化の機制は(1)の第⑩項中の指摘と同じである）。

(5) G₁～G₃の要約

本章では、SA・Aの維持（悪化一般の阻止）の鋭い予測因として、弱い「転学（部・科）志

表 5 7月時 SA・B (G₄~G₉) 群における2月時 SA の予測因

項目番号	項 目		G ₄ +G ₅			G ₄			G ₅			G ₉		
			n	\bar{x}	SD	n	\bar{x}	SD	n	\bar{x}	SD	n	\bar{x}	SD
1	大 学 満 足 感		112	2.59	.88	27	2.33	.96	85	2.67	.84	30	2.60	.77
6	講 義 の 魅 力 度		112	3.45	.89	27	3.11	1.01	85	3.55	.82	30	3.67	.84
11	サークル関与度		74	2.12	1.15	22	1.77	.92	52	2.27	1.21	18	2.00	1.09
12	友 人	友 人 数	108	2.54	.78	26	2.19	.90	82	2.65	.71	30	2.70	.95
13	関 係	適 応 感	112	2.30	.70	27	1.96	.76	85	2.41	.64	30	2.43	.77
16	対	適 応 感	109	2.03	.74	27	1.85	.72	82	2.09	.74	28	2.29	1.01
17	家 族	交 流 度	105	2.36	.82	26	2.15	.79	79	2.43	.81	22	2.68	1.00
18	生き方	考える時間	112	2.91	1.01	27	2.70	1.17	85	2.98	.95	30	2.50	1.04
19	指針	確、立 感	112	3.28	1.14	27	2.74	1.10	85	3.45	1.11	30	2.97	1.16
21	生きがい・充実感		111	3.06	.69	27	2.82	.62	84	3.14	.70	30	3.00	.79
22	3 月	学業への意欲	112	2.28	.96	27	2.00	.92	85	2.37	.96	30	2.27	.98
23	ま で	出 席 意 欲	112	2.08	.89	27	1.78	.75	85	2.18	.92	30	2.13	.90
24	の	サークル関与意欲	112	2.55	1.29	27	2.07	1.36	85	2.69	1.24	29	2.52	1.33
25	展 望	交友への意欲	112	1.81	.83	27	1.48	.64	85	1.92	.86	30	2.00	1.05
総括的適応感 (SA)			112	3.00	.00	27	3.00	.00	85	3.00	.00	30	3.00	.00

注) 1. 「比較」欄; マイナスは、より肯定的反応ほど2月時SAが否定的になる逆機能的関連。数値はt
 2. 「漸増・減」欄; プラスはG₄からG₉にかけての平均値漸増、即ちより肯定的反応ほど2月時SAが

向」, 強い「サークル関与度」, 自我中核的な準拠集団としての「サークル」, 強い「下宿・寮での交流度」, 「生きがい・充実感」, SA・Aの理由として「不満・悩みなし」という消極的理由を記述しない事の計6反応が指摘された。また, <弘前>大学や学部への満足感, サークル・交友といった学生生活のインフォーマルな局面への積極的関与とそれによる自我支持, 7月までの間何らかの自我関与的活動をもち, 強い「生きがい・充実感」を感じ, 人生指針も確立的なこと, さらに, 3月までの目標活動の実現に過大な期待をもたない事, 等もSA・Aの悪化阻止の関連要因である事が知られる。しかし人生指針については, その確立への強い関心はSAのBへの悪化はもたらされにくいものの, Aを維持するかCに悪化するかの両極化がもたらされ易く, その確立への強い自我関与はCへの悪化をもたらし易いから, 7月時のSAがAである者にとって, 人生指針模索への強い構えは2月時SAにマイナスの影響を与える場合が多いと見做すのが妥当であろう。

また, 学業や講義への関わりや意欲は2月時SAとの関連が弱いことも注目される。

Ⅲ-2 7月時中間的適応群における2月時総括的適応感の予測因

7月時SAがB (「中間的適応度」) であるG₄~G₆について, 2月時SAに予測的関連をもつと思われる7月時の反応を求め, 2月時SAに関連する生活空間体制とそのSAに対する機能を考察する。比較結果は表5・表6に一括表示した。

—五段階評定項目—

G ₅ +G ₆			比						較 ¹		
			悪化・改善—維持要因			非適応化要因	適 応 化 要 因				
n	\bar{x}	SD	G ₅ :G ₆	G ₄ :G ₅	G ₄ :G ₆	G ₄₊₅ :G ₆	漸増・減 ²	G ₄ :G ₅₊₆			
115	2.65	.82		1.74°				1.75°			
115	3.58	.83		2.27*	2.22*		+	2.53*			
70	2.20	1.18		1.71°							
112	2.66	.78		2.64*	2.01°		+	2.67**			
115	2.42	.68		3.00**	2.27*		+	3.05**			
110	2.14	.82			1.81°		+				
101	2.49	.86			1.96*		+	1.76°			
115	2.85	.99	-2.28*			-1.95°					
115	3.32	1.14	-2.00*	2.89**				2.39*			
114	3.11	.72		2.16*				1.92°			
115	2.34	.96		1.72°							
115	2.17	.91		2.04*				2.05*			
114	2.65	1.26		2.19*				2.53*			
115	1.94	.91		2.33*	3.53**		+				
115	3.00	.00									

値。°P<.10, *<.05, **<.01。

肯定的となる。

(1) SA の維持—悪化の予測因

G₅ と G₆ を分化でき、A への改善の可能性を無視した場合に、SA・B の維持か C への悪化かに予測的関連をもつ反応は、五段階評定項目の 2 反応（表 5）と、その他項目 2 反応（表 6）の計 4 反応である。これらから SA・B の悪化阻止にかかわる 7 月時の特徴的な生活空間体制とその機能は次の 3 項にまとめられよう。①自我中核的準拠集団として「高校期の友人」をあげる者が G₅ で少ないことから、高校期の友人を最もかけがえのない人とし、しないこと。高校期の友人との接触機会は乏しくなるし、もし友人も弘前大学に在学しているとしても青年期後期の価値観の変容に伴い彼等との間の心理的距離は大きくなろうし、更に、高校期の友人に固執すること自体、大学での新しい、共通の価値態度をもつ友人との出会いがまだ体験されないことを示唆するから、7 月以降彼等からの支えはますますえにくくなる（即ち、自我中核的領域での人格非適応が深まる）し、それ故に、生活空間構造の根底的な再編も迫られやすくなるという機制を通して、2 月時の SA・C への悪化が準備されるものと解される。②学部進学後の最大の自我関与的活動として「学業」をあげる者が G₅ で少ないことから、学部移籍後に学業に力をいれるとする構えが弱いこと。一般に教養部在籍中はインフォーマルな活動を中心に、学部で学業中心にといった、教養部のモラトリウム性が 54 年度新入生で強まっている（豊嶋ほか 1981. III 報）のだが、学業からのモラトリウム空間として教養部を位置づけることは、7 月時 SA が B の場合は C への悪化要因となることがここから

表 6 7 月時 SA・B (G₄~G₆) 群における 2 月時 SA の予測因

項 目 ・ 反 応 ¹		G ₄ +G ₅	G ₄	G ₅	G ₆	G ₅ +G ₆	
		n = 112	n = 27	n = 85	n = 30	n = 115	
居 住 形 態	(下宿 + 間借り) 下宿 寮	37(33.0%) 27(24.1) 38(33.9)	6(22.2) 5(18.5) 13(48.2)	31(36.5) 22(25.9) 25(29.4)	13(43.3) 12(40.0) 4(13.3)	44(38.3) 34(29.6) 29(25.2)	
サークル参加	や っ て い る や っ て い な い	71(63.4) 40(35.7)	22(81.5) 5(18.5)	49(57.7) 35(41.2)	18(60.0) 12(40.0)	67(58.3) 47(40.9)	
友 人 の 質	きがねない人がいる 遊び友達はいる しゃべる程度 (遊び友達+しゃべる)	58(51.8) 13(11.6) 14(12.5) 27(24.1)	19(70.4) 0 (0) 2 (7.4) 2 (7.4)	39(45.9) 13(15.3) 12(14.1) 25(29.4)	14(46.7) 3(10.0) 8(26.7) 11(36.7)	53(46.1) 16(13.7) 20(17.4) 36(31.3)	
自我関与的活動 (4～7月)	サークル・クラス活動 無 答 (な し + 無 答)	34(30.4) 22(19.1) 27(24.1)	12(44.4) 2 (7.4) 2 (7.4)	22(25.9) 20(23.5) 25(29.4)	10(33.3) 8(26.7) 9(30.0)	32(27.8) 28(24.3) 34(29.6)	
できなかった こ と	交 友 な し (な し + 無 答)	2 (1.8) 52(46.4) 53(47.3)	2 (7.4) 7(25.9) 8(29.6)	0 (0) 45(52.9) 45(52.9)	0 (0) 11(36.7) 14(46.7)	0 (0) 56(48.7) 59(51.3)	
やらざるをえな かったこと	サークル・クラス活動 な し (な し + 無 答)	15(13.4) 63(56.3) 71(63.4)	7(25.9) 12(44.4) 15(55.6)	8 (9.4) 51(60.0) 56(65.9)	3(10.0) 21(70.0) 24(80.0)	11 (9.6) 72(62.6) 80(69.6)	
自我関与的活動 (7月)	サークル・クラス活動 人 生 観・読 書 無 答 (な し + 無 答)	35(31.3) 11 (9.8) 10 (8.9) 28(25.0)	12(44.4) 6(22.2) 2 (7.4) 4(14.8)	23(27.1) 5 (5.9) 8 (9.4) 24(28.2)	6(20.0) 4(13.3) 6(20.0) 12(40.0)	29(25.2) 9 (7.8) 14(12.2) 36(31.3)	
自我中核的 準拠集団	高校期の友人 大学での友人	15(13.4) 25(22.3)	6(22.2) 3(11.1)	9(10.6) 22(25.9)	7(23.3) 10(33.3)	16(13.9) 32(27.8)	
自我中核的活動	人 生 観・世 界 観	6 (5.4)	4(14.8)	2 (2.4)	3(10.0)	5 (4.3)	
適応改善方法	アイデンティティー 無 答 (わからない+無答)	11 (9.8) 19(17.0) 35(31.3)	1 (3.7) 9(33.3) 11(40.7)	10(11.8) 10(11.8) 24(28.2)	6(20.0) 3(10.0) 5(16.7)	16(13.9) 13(11.3) 29(25.2)	
今後の自我 関与目標 活 動	教養部	人生観・読書 単 位・進 級 学 業	11 (9.8) 2 (1.8) 68(60.7)	7(25.9) 2 (7.4) 18(66.7)	4 (4.7) 0 (0) 50(58.8)	4(13.3) 1 (3.3) 23(76.7)	8 (7.0) 1 (0.9) 73(63.5)
	学、部						
卒 後 進 路	就 職・家 業 家 事	68(60.7) 0 (0)	19(70.4) 0 (0)	49(57.7) 0 (0)	13(43.3) 2 (6.7)	62(53.9) 2 (1.7)	

注) 1. (+) は合成カテゴリー。

2. 「比較」欄：数値は χ^2 値。「傾向」欄を除き $df=1$ 。○ $P<.10$, * $<.05$, ** $<.01$ 。

3. 「傾向」欄：数値は $\bar{\chi}_2^2$ 値 ($-r_{12}=.25$)。> は減少傾向, < は増大傾向。— は、 $\bar{\chi}_2^2$ 値は有意だが、数値を付さない不等号は漸減 (>)・漸増 (<) を意味する。

示唆される。③人生指針の「考える時間の多少」と「確立感」で G₅ がより否定的反応になる逆機能的関連が見られるから、生き方や人生指針探索への弱い関心と弱い確立感。なお、弱い関心・弱い確立感は(2)・(3)で見るように、SA・Aへの改善を阻みBを維持する要因でもある。

(2) SA の改善—維持の予測因

G₄ と G₅ を分化でき、悪化の可能性を無視した場合に、SA・Aへの改善かBの維持かに予測的関連をもつ反応として、五段階評定項目 6 反応 (表 5)、その他の項目で 14 反応と 3 合成カテ

比		較 ²			
悪化・改善・維持要因		G ₄ :G ₅	非適応化要因		適応化要因
G ₅ :G ₆	G ₄ :G ₅		G ₄ +5G ₆	傾 向 ³	G ₄ :G ₅ + ₆
		< 2.85° > 6.65**	< 3.00° > 3.88*	< > 8.27*	< 2.98° > 5.52*
	> 4.04* < 3.65*				> 4.10* < 3.79°
	> 4.92* < 3.30° < 4.29*	> 3.28° < 5.35*	< 3.63°	< 4.33° < 6.97*	> 5.16* < 2.96° < 5.21*
	> 3.34° < 4.29*			< 5.68*	> 2.84° < 2.82° < 4.56*
	> 2.88° < 6.01* < 4.47*			—	> 4.13* < 4.59* < 4.12*
	> 4.82*	< 3.81°	< 2.95°	<	> 5.29* < 2.99°
	> 2.88° > 4.47*	> 3.93* < 3.30°	< 2.90°	> 4.47° <	> 3.94* > 4.80*
< 3.01°		< 2.82°		<	
	> 4.06*				
	< 4.77*	> 3.36° > 2.97°		> 8.16* >	> 8.11**
	> 8.16*				> 8.33**
< 3.05°	> 2.88°				
		> 4.22*	> 2.91° < 3.53°	> 4.27° —	

期待度数 ≤ 0.5 の細胞があるため検定適用不能であったことを示す。

リー（表6）が見出される。これらからSA・Bの改善要因として次の8項がえられよう。

①「大学満足感」より、大学への強い満足感、②G₄で、4月～7月の自我関与的活動が「なし＋無答」が少なく、「生きがい・充実感」も強いことから、7月までに何らかの強い自我関与を伴う活動を展開し、そのことで自我支持され充実感を感じていること。7月までのアイデンティティの形成が後のSAにプラスの影響を与えると解される。但し、「やりたかったができなかった事」が「なし」・「なし＋無答」もG₄で少ないから、7月までの自我関与的（目標）活動の全てに関わ

った・達成されたとする認知は改善に結びつかないといえよう。全てが達成されたにも拘らずSAがBにとどまっていること自体、当該活動(目標)が自我周延的であるか、それ以外に自我中核的たるべき課題がひそんでいることを示唆するし、また、全てが3ヶ月の短期間のうちに達成されたことは内的・外的障害の克服過程が単純であったとも考えられるから、強いアイデンティティ形成をもたらしていくのかもしれない。③「講義の魅力度」「学業への意欲」「出席意欲」から、講義による自我支持と講義・学業への積極的構え。高成績等、大学のフォーマルな規範や「学業重視の生活たるべきこと」といった潜在的規範に対する社会(文化)適応と、社会(文化)適応感がえられやすいために、SAの改善に結びつくと思われる。④G₄が「友人数」多く「友人関係での適応感」強く、友人の質として「きがねない友人」を持つ者が多く「遊び友達」までしかいない者、及び「遊び友達まで+しゃべる程度の友達」は少ないことから⁹⁾、多い友人との円滑な関係と深い友人の存在、それらによる深い自我支持。⑤G₅では「やりたかったのにできなかった事」として「交友」を記述する者が、例数は少数ながらも、多く⁹⁾、今後の「交友への意欲」も強いことから、友人関係重視の構え。⑥G₄にサークル参加者が多く、「サークル関与度」「関与意欲」も強く、7月までも7月現在も最大の自我関与的活動として「サークル・クラス活動」をあげる者が多い。即ち、サークル参加やサークル等の自治活動への自我関与。サークル集団及び活動自体による自我支持がえられ易いためであろう。但し、「やりたくなかったのにやらざるをえなかった事」として「サークル・クラス活動」をあげる者もG₄に多いから、自治活動への係わりが必ずしも自発的ではなく、義務的拘束的な関わりであってもよいと言えよう。これには、義務的拘束的性格の課題の達成感や社会適応感によるSAの改善という機制が考えられよう。さらに、当初は拘束的課題と認知して係わるうちに、その領域への自我関与が成立し、その領域に向けた主体的欲求が形成されるといった欲求の機能的自律 functional autonomy を媒介とするSA改善という機制も働らくかもしれない。⑦G₄は「人生指針確立感」が強く、現在及び今後の最大の自我関与的活動を「人生観探究・読書」とする者が多く、自我中核的活動に「人生観・世界観」探究を選ぶ者が多い。即ち、より確立的な人生指針と、人生指針・世界観重視の構え。但し、適応改善の方法として、人生観や目標の発見・確立等「アイデンティティ確立」を記述する者はG₅に多い。人生指針や目標の発見・探究を「適応改善」の最大の方法として選んでも、それらの発見や確立には長い経過が必要であろうから2月までに発見・確立をみてSAが改善するのはむずかしいと思われる。それに対して、その他の適応改善の試みとともに人生指針・世界観の探索を併行していくことが、SA改善の要因になるものと思われる。また、(1)でもふれたように、強い「人生指針確立感」は、Aへの改善要因であるとともに、Cへの悪化要因でもある点に注意されたい。これについては(3)で考察を加える。⑧学部移籍後に最大の自我関与を展望している活動として「単位取得・進級・卒業」を記述する者が例数は少ないもののG₄で多い⁹⁾から、学部進学後の大学制度に対する適応重視の構え、あるいは、スムーズな進級・卒業への強い意欲。

(3) SA・Bの非適応化・適応化要因

G₄+G₅とG₆を分化できSA・Bの非適応化に関連する反応は、五段階評定項目で1反応(表5)、その他の項目で6反応1合成カテゴリー(表6)であり、G₄とG₅+G₆を分化できる、SA・

Bの適応化の関連反応は、五段階評定項目で9反応(表5)、その他の項目で15反応4合成カテゴリーである。これに加えて、G₄~G₆での漸増あるいは漸減が見られ、適応化と非適応化の双方に関連する反応として次の11反応2合成カテゴリーが知られる。五段階評定項目では、「講義の魅力度」「友人数」「友人関係での適応感」「家族との適応感」「対家族交流度」「交友への意欲」の6反応である(表5)。五段階評定以外の項目では、G₄~G₆での増大傾向をみせるもの1反応2合成カテゴリー、減少傾向をみせるもの4反応をえた(表6)。

さらに、「G₄とG₆を分化できG₄からG₆にかけて順に標本レベルの漸増(減)を見る」という、五段階評定以外の項目に対する付加的規準によって、「下宿+間借り」居住、「やりたくなかったがやらざるをえなかった事」が「なし」、7月時の自我関与的活動「なし+無答」、自我中核的準拠集団としての「大学の友人」の計3反応1合成カテゴリーで漸増、適応向上の方法が「わからない+無答」で漸減を観察できる。

以上の比較結果を生活空間領域ごとにまとめると、まず、非適応化・適応化の双方にほぼ共通に関連する生活空間体制として次の6項が見出される。①「友人数」と「友人関係での適応感」はG₄で強く、G₄からG₆にかけて次第に弱まり、「交友への意欲」はG₄からG₆にかけて弱まり、「やりたかったができなかった事」を「交友」とする者が漸減、「友人の質」では全体的にG₄が深くG₆が浅い質にとどまる傾向を見せる¹⁰⁾。これらから、交友重視の構えと、深い友人も含む広い交友とそこでの適応感・自我支持感。但し、自我中核的準拠集団を「大学での友人」とする者はG₄からG₆にかけて漸増しているから、大学での友人を自我の中核部にまだ定位しないこと。入学後3ヶ月の時点での「大学の友人」を中核部に定位するのは尚早だということになる。②「やりたくなかったがやらざるをえなかった事」を「なし」とする者がG₄からG₆にかけ漸増し、「なし+無答」でG₆が多いから、何らかの義務的拘束的課題があり、その達成に志向した体験。内発的でない課題をひきうけそれに適応し達成しようとする構えは、学生生活に限らず生活の円滑な展開に必要なものであろう。そのような課題をひきうけた体験が適応化と非適応化阻止とに関連するのは首肯できるところである。③「寮」居住者にG₄が多くG₆が少なく、「下宿」又は「下宿+間借り」の場合は、G₄で少なくG₆で多く漸増も観察される。これらから、寮居住であり、下宿又は間借り生活ではないこと。7月時SAがBの場合、寮生活による複雑な人間関係や、それに伴う規制や適応への圧の存在とそれへの適応が対人関係一般への対処レディネス(readiness, 準備態制)として機能したり、密な人間関係による支えがえられ易いといった機制が、適応化と非適応化阻止とをもたらしやすいのだろうか¹¹⁾。④「対家族適応感」はG₄からG₆にかけ次第に弱まり、「対家族交流度」ではG₄が強く、G₆にかけて弱まる。ここから、家族との密で円滑な関係とそれによる自我支持。⑤適応改善の方法が「無答」でG₄が多く、G₆にかけて減少傾向も見られ、また「わからない+無答」で漸減が観察されるから、SA・Bからの改善方途がまだ明確化されていないか、性急な改善をはからない余裕の存在。SA・Bは、Cとは異なり非適応感が強いわけではなく、むしろ、欲求体制や価値態度体系が未整理であることを示唆する。かかる状態には性急さよりも着実な体制化が望ましいのであろう。⑥卒業進路を「就職」とする者がG₆に少なく、G₄からG₆で漸減しているから、卒業後就職への志向。

以上計6項が、適応化要因であると同時に、非適応化阻止要因である。

これに加え、SA・Bの非適応化のみに関連する生活空間体制として次の5項がえられる。①4月～7月の自我関与的活動「なし+無答」がG₆にかけて増大傾向を見せ、7月時自我関与的活動「なし」がG₆に多く「なし+無答」もG₄からG₆にかけ漸増する。以上から、自我関与対象に乏しく自我関与的活動を展開できないでいること。②「講義の魅力度」より、講義による自我支持が弱いこと。③「人生指針を考える時間」がG₆で多く、人生指針探索への過剰な関心。④例数は少ないが卒業進路「家業・家事」がG₆で多く¹²⁾、家業(事)志向。これら①～④を備える生活空間体制が非適応化を来し易い。

これに対して、SA・Bの適応化をのみ生じ易い生活空間体制は次の4項にまとめられよう。①G₄で「生きがい・充実感」強く、4月～7月の自我関与的活動「なし」及び「なし+無答」が少なく、「やりたかったができなかった事」でも「なし」「なし+無答」が少ない。また7月時自我関与的活動「なし+無答」ではG₄からG₆での漸増が観察される。以上より、何らかの強い自我関与を伴う活動の展開とそれによる自我支持感・充実感。但し、7月までの目標活動の全てに関与し・達成したという認知をもたないこと。これらのSAへの機能は、本章(2)②項に同じ。②G₄が強い「講義の魅力度」「出席意欲」をもつ事から、講義による自我支持と出席への積極的構え。③G₄で、サークル参加者が多く、「関与意欲」も強い。また、7月まで及び7月時の最大の自我関与的活動としても、また「やりたくなかったがやらざるをえなかった事」としても、「サークル・クラス活動」をあげる者がG₄で多い。以上から、サークル参加やサークル等の自治的活動への強い自我関与と、サークル集団・活動自体による自我支持。なお、それら活動への係わりが自発的ではなく義務的拘束的であっても構わない。この2月時SAは対する機制は本章(2)の⑥項で述べた通りである。④G₄は「人生指針確立感」が強く、7月時及び今後において「人生観探索・読書」に最大の自我関与をしている(していく)とする者が多いから「より確立的な人生指針と人生観や自己の探索への強い構え」。

なお、「人生指針確立感」はG₆に比べG₄とG₆で強く(表5)、SA・Bの維持か他段階への移行かの一般的な予測因と考えられる。この時点でのより確立的な人生指針に沿ってその後の生活が展開できたり、その後の生活への将来展望形成が可能であった場合にはSAは改善し易く、逆に、それらが不可能である場合人生指針再編が迫られたり、人生指針と生活の乖離が生じてSAは悪化し易いのであろう。そしてこの時点での人生指針確立度が弱い場合は、このいずれも生じにくくSA・Bが維持され易い。

また「友人の質」に関しては各選択肢への反応を詳しく見れば非適応化と適応化の要因とは微妙に異なってくる。「親友とよべる人」を作れているか否かは非適応化・適応化のいずれにも関連が弱く、「きがねない人はいる」場合は適応化し易いが、いなくとも非適応化し易いわけではないのに対して、「遊び友達」までしかいない場合や「しゃべる程度の友達」しかいない場合には、適応化しにくく、非適応化し易いと言える。

(4) G₄～G₆の要約

SA・Bの悪化と改善の双方に関連する反応として「人生指針を考える時間の多少」があり、

SA・Bの非適応化と適応化の双方に関連する生活（空間）体制として、深い・豊かな友人関係、義務的・拘束的課題や規制への適応体験、家族による自我支持、卒業後就職への志向¹³⁾などがあげられ、また、7月までに何らかの自我関与的活動を展開できたこと、7月時のサークルへの強い自我関与、講義による自我支持なども、非適応化と適応化に共に関連している。

改善・悪化要因も含め概観すると、友人や家族からの支えが重要であり、更に、自我関与的活動の展開など、7月までにアイデンティティ形成過程が進行している事が、2月時SAにプラスの影響を及ぼす。しかし人生指針確立のために強い自我関与をもって探索を進める事こそ望ましいと言えるものの、人生指針探索への関心や確立感が強い場合2月時SAがA又はCに両極化し易い。従って、単なる関心や確立感ではなく、具体的な探索行動や補強が望まれよう。また、所属満足感の強弱は後のSAに大きな影響を与えず、講義・学業といった大学生活のフォーマル局面への関わりや意欲、サークルへの関与などが強い場合はSAは改善し易いが、弱くとも悪化するわけではない事も示された。

Ⅲ-3 7月時非適応群における2月時総括的適応感の予測因

7月時SAがC（「非適応」）であるG₇～G₉について、2月時SAの予測因たりうる反応を求め、2月時SAに関連する7月時の生活空間体制を考察したい。比較結果は表7・表8の通りである。

(1) SAの改善一般一維持の予測因

表7・8より、五段階評定項目での2反応とその他の項目での4反応がG₇+G₈とG₉とを分化でき、それ故、SA・Cからの改善改善一般がCの維持かに予測的関連をもつと知られる。このうち、「全体的適応予想」のみが、G₇及びG₈とG₉とを共に分化できる、改善一般の鋭い予測因となる。

これらからSA・Cからの一般的な改善要因となる生活空間体制とそのSAに対する機能を探ると次の3項がえられよう。①「サークル参加」者がG₉に少なく、サークル参加とサークル集団・活動自体による自我支持。②「力を入れたいことの実現見込」「全体的適応予想」より、自我関与的目標の達成や適応改善の展望をもつこと¹⁴⁾。SAがCの場合、要求水準が低いために達成感や「改善」感がえられ易いのか、或いは、SA・Cからの脱出への強い動機づけが目標達成や適応改善への試行を成功させ易いのだろうか。③SA・Cの理由として「大学外の環境条件（例えば、居住先・街・風土等）」及び「大学の制度・実態」を記述する者がG₉に多く、いわばやや＜マクロ＞な環境条件への不適応感によるSA・Cではないこと。それら環境条件を個人が改変するのは極く困難であるために、Cからの改善が生じにくいのであろうか。

以上3項のうち、①②はG₇・G₈比較でも成立するAへの改善に強く関連する特徴でもある。

(2) SAの適応への改善一維持の予測因

G₇とG₉を分化でき、SA・Cの維持か、改善するとすればAまでの改善がありうるかに予測的関連をもつ反応は、五段階評定項目の5反応（表7）、その他の項目の7反応（表8）の計12反応である。これらから、CからAへの改善要因として次の8項の生活空間体制と機能が考えられる。なお、①②は、前節の①②と全く同一である①サークル参加とそれによる自我支持。②今後の自我

表 7 7月時 SA・C (G₇~G₉) 群における2月時 SA の予測因

項目番号	項 目		G ₇ +G ₈			G ₇			G ₈			G ₉		
			n	\bar{x}	SD	n	\bar{x}	SD	n	\bar{x}	SD	n	\bar{x}	SD
7	講義と	ついていける	35	2.77	.88	11	2.18	.75	24	3.04	.81	21	3.00	1.00
8	の関係	出席度	35	2.54	.89	11	2.18	.87	24	2.71	.86	20	2.95	1.19
14	下宿・寮での	適応感	22	2.82	1.01	7	3.57	.78	15	2.47	.92	16	2.63	1.03
20	生活の	納得感	17	3.77	.90	6	3.33	1.21	11	4.00	.63	11	4.18	.98
23	出席意欲		35	2.57	1.24	11	2.36	1.50	24	2.67	1.13	21	2.14	.85
26	力を入れたい事 の実現見込		28	2.32	.77	9	2.00	.71	19	2.47	.77	16	2.81	.98
27	全体的適応予想		35	2.71	.57	11	2.55	.52	24	2.79	.59	21	3.24	.63
総括的適応感 (SA)			35	4.03	.17	11	4.00	.00	24	4.04	.20	21	4.19	.40

注) 1. 「比較」欄; マイナスは、より肯定的反応ほど2月時SAが否定的となる逆機能的関連。数値はt
 2. 「漸増・減」欄; プラスはG₇からG₉にかけての平均値漸増、即ちより肯定的反応ほど2月時SAが

表 8 7月時 SA・C (G₇~G₉) 群における2月時 SA の予測因

項 目 ・ 反 応 ¹			G ₇ +G ₈	G ₇	G ₈	G ₉	G ₈ +G ₉
			n=35	n=11	n=24	n=21	n=45
所属不満の理由	学部学科非適応		1 (2.9%)	1 (9.1)	0 (0)	4 (19.1)	4 (8.9)
サークル参加	やっている やっていない		20(57.1) 15(42.9)	8(72.7) 3(27.3)	12(50.0) 12(50.0)	6(28.6) 15(71.4)	18(40.0) 27(60.0)
友人の質	(親友+きがねない人) きがねない人がいる		25(71.4) 21(60.0)	10(90.9) 9(81.8)	15(62.5) 12(50.0)	11(52.4) 9(42.9)	26(57.8) 21(46.7)
自我関与的活動(4月~7月)なし+無答			11(31.4)	0 (0)	11(45.8)	6(28.6)	17(37.8)
できなかった事	交 友		2 (5.7)	2(18.2)	0 (0)	0 (0)	0 (0)
やらざるを えなかった事	な し + 無 答		16(45.7) 20(57.1)	3(27.3) 4(36.4)	13(54.2) 16(66.7)	14(66.7) 15(71.4)	27(60.0) 31(68.9)
自我中核的活動	な し		5(14.3)	4(36.4)	1 (4.2)	1 (4.8)	2 (4.4)
SA ・C の 理 由	自由選択	大学の制度・実態	2 (5.7)	2(18.2)	0 (0)	0 (0)	0 (0)
	多肢選択	大学の制度・実態	4(11.4)	1 (9.1)	3(12.5)	9(42.9)	12(26.7)
		大学外環境 対人関係	9(25.7) 11(31.4)	3(27.3) 1 (9.1)	6(25.0) 10(41.7)	10(47.6) 10(47.6)	16(35.6) 20(44.4)
適応改善方法	環 境 調 整		5(14.3)	4(36.4)	1 (4.2)	1 (4.8)	2 (4.4)

注) 1. (+) は合成カテゴリー。
 2. 「比較」欄; 数値は χ^2 値。「傾向」欄を除きdf=1。○<P.10, *<.05, **<.01。
 3. 「傾向」欄; 数値は χ^2 値 ($-r_{12}=.43$)。<は減少傾向, >は増大傾向。-は、 χ^2 値は有意だが、期

—五段階評定項目—

G ₈ +G ₉			比 較 ¹					
			改 善 一 維 持 要 因			G ₇ :G ₈	応 反 化 要 因	
			G ₇₊₈ :G ₉	G ₇ :G ₉	G ₈ :G ₉		G ₇ :G ₈₊₉	漸増・減 ²
45	3.02	.89		2.31*		2.91**	2.83**	
44	2.82	1.02		1.82°			1.87°	+
31	2.55	.96		-2.08*		-2.62*	-2.56*	
22	4.09	.81					1.73°	
45	2.42	1.03			-1.70°			
35	2.63	.88	1.79°	2.10*			1.94°	+
45	3.00	.64	3.14**	3.05**	2.41*		2.15*	+
45	4.11	.32		2.11*			2.32*	+

値。°P<.10, *<.05, **<.01。

肯定的になる事を示す。

—自由記述・選択式項目—

比			較 ²		
改 善 一 維 持 要 因			G ₇ :G ₈	適 応 化 要 因	
G ₇₊₈ :G ₉	G ₇ :G ₉	G ₈ :G ₉		G ₇ :G ₈₊₉	傾 向 ³
		< 2.94°			
> 4.31*	> 4.07*				> 5.87*
< 4.31*	< 4.07*				< 5.87*
	> 3.01°			> 2.96° > 3.09°	> 4.73° > 4.62°
			< 5.38*	< 4.31*	
				> 3.00°	—
	< 3.06°			< 2.72°	< 4.51° < 4.10°
	> 5.72*		> 4.03*	> 8.82**	
				> 3.00°	—
< 5.26*		< 3.84°			< 7.32*
< 2.81°	< 3.20°			< 3.33°	< 4.88°
	> 3.33°		> 4.03*	> 6.37*	

待度数≤0.5の細胞があるため検定適用不能であったことを示す。

関与的目標の達成や適応改善の展望をもつこと。③ G₇で自我中核的活動が「なし」とする者が多いから、まだ自我中核的な（「かけがえのない」）活動を限定しない探索的態度。何らかの自我中核的活動を追求対象としてもちながらもSA・Cであるとは即ち、その活動が強くフラストレートされているか自我中核的活動と他の諸活動の間の強い葛藤の存在を示唆する。従って、SA・Cの場合まだ自我中核的活動を決定できない状態が寧ろ、7月以降における決定とその展開を契機とするSA改善をもたらし易いと解される。④ G₇に「やりたくなかったがやらざるをえなかった事」を「なし」とする者が少ないから、義務的・拘束的課題の存在とそれへの適応・達成の体験。⑤「講義についていける」「出席度」より、講義への適応感。言うまでもなく「ついてこれること」「出席すること」は、大学（教官）が学生に課する中心的要請のひとつである。それ故、この二つの要件をみたしてきたとの自己認知は大学における社会（文化）適応感をおしあげ、それがSA・Cの者にとって人格適応感を改善する機能をもつのであろう。⑥ G₇に「気がねない友人がいる」が多い。但し、「親友」の有無では差は認められない。従って、親友の有無は問わず、「きがねない友人」をもつこと¹⁴⁾。彼等からの支えがSA改善に有効であろうし、「親友」まで深まっていく可能性も大きいからと解される。⑦ G₇で「下宿・寮での適応感」が弱い。即ち、下宿・寮での非適応の存在。もしくは下宿・寮への強い適応がないこと。前者は＜宿がえ＞によって解消が可能であろう。後者については、強い適応とは、SAがCに過ぎない学生生活が下宿・寮での適応によって辛うじて支えられていることを意味し、学生にとっての本業よりも寧ろ下宿・寮生活それ自体が自我の中核部を占めることになる結果、本業からの疎隔感が強まり社会（文化）非適応感を経てSA・Cに留まる、という機制も考えることができる。⑧適応改善の方法として「環境調整」を記述する者がG₇に多く、外界への働きかけや環境変更による適応改善への構え。「環境調整」以外のカテゴリーは、生活姿勢を変えとかアイデンティティー模索、一定活動への自我関与度合の変更、生活リズムの変容といった内的調整が主であるから、内的調整よりも外的調整を重視する構えと括り直してもよい。

(3) SA の中間的適応度への改善の予測因

G₈とG₉を分化でき、Cの維持か改善するとすればBまでの改善がありうるかに予測的関連をもつ反応として、五段階評定項目の2反応（表7）、他項目の2反応（表8）が見出される。これらから、Bへの改善要因となる7月時生活空間体制として次の3項がえられる。①「出席意欲」がG₈で弱く、出席への強い構えをもたぬこと。「出席」は学業にとっては周辺の課題であろうし、困難な課題でもある。周辺の課題のみに適応できたとしても、深い社会（文化）適応感はえにくいであろうし、外的・周辺の課題への焦点づけは、却って内的・自我中核的課題への焦点づけに障害になることもあろう。更に強い出席意欲と出席できなかった現実との落差もSAの改善を阻むものと解される。②例数は少ないが、所属不満の理由として「学部・学科との間の非適応感」をあげる者¹⁵⁾、SA・Cの理由（多肢選択）として「大学の制度・実態」を選ぶ者が共にG₈に少ない。従って、大学の制度や学部・学科への不満や非適格感が意識されないこと。学部・学科との現実的接触は学部移籍後（2年次）に開始されるために、7月時点での学部・学科への不満・非適応感を2月までに現実的に再吟味するのは難かしいであろうし、そのような所属を選んだ事の自己受容も困

難であろう。そのためにSA・Cからの改善が生じにくいものと思われる。③「全体的適応予想」より、適応改善への展望をもつこと。

(4) SA・Cからの適応化要因

G₇+G₈とG₉を分化できる反応は、五段階評定項目6反応(表7)、他項目6反応3合成カテゴリー(表8)である。これに加えて、G₇~G₈での増大傾向を見せる3反応と、減少傾向をみせる2反応も適応化要因となる。なお、G₇からG₉にかけての漸増(減)という規準ではじめて拾われる反応は皆無である。

これらから、7月時のSA・Cから2月時にAへ適応化することに関連する生活空間体制として次の8項がえられよう。①G₇で、4月~7月の自我関与的活動「なし+無答」が少く、「やりたくなかったがやらざるをえなかった活動」の「なし」「なし+無答」がG₇で少なかったり、G₇からG₉にかけて減少傾向が見出される。以上より、7月までの何らかの自我関与的活動や義務的拘束的活動の展開と、それによる自我支持又は達成(課題への適応)感による自我支持。②「講義についていける」「出席度」から、出席率も高く、講義に対する学力面での適応感も強いこと。即ち、出席や講義への適応感。このSAへの機能は本章(2)第⑥項と同様。③G₇にサークル「参加」者が多く、サークルへの参加とサークル集活動自体に・因よる自我支持。④「きがねない友人はいる」及び「きがねない友人+親友あり」がG₉にかけて漸増し¹⁶⁾、「SA・Cの理由」を「対人関係」とする者がG₇で少ない。即ち、深い友人の存在と円滑な対人関係。⑤「下宿・寮での適応感がG₇で弱く、下宿・寮生活への強い適応をみせていないこと。このSAに対する機制は本章(2)第⑦項に同じ。⑥自由記述による「SA・Cの理由」において「大学の制度・実態」を中心の訴えをなす者がG₇に多い。この反応はG₇~G₉全体で2例に留まり¹⁷⁾、多肢選択による「Cの理由」では「大学の制度・実態」は逆にG₉にかけた増大傾向が認められる。従って、大学の制度・実態をSA・Cの唯一の理由として鋭く意味づけている場合は中核的自我における自責から免れやすかったり、<大学>の受容とそのような大学にいる<自己>の受容とを分離して、<大学>を非難しながらも自己受容を進めていくこと、等を通して適応化し易い。それに対して、制度・実態の不満が他の理由とともに意識されたり、鋭い焦点づけがない場合は適応化しにくいのであろう。後者の場合のSAに対する機制は本章(1)第③項の指摘が成立しよう。⑦適応改善方法を「環境調整」とする者がG₇に多く、外界への働きかけや環境変更による適応改善への構え。この機制は本章(2)第⑧項に同じ。なお、④⑦を併せると、SA・Cを巡る環境への鋭い原因帰属も適応化要因であると考えられる。⑧「人生指針に照らした生活の納得感」「力を入れたい事の実現見込」「全体的適応予想」より、SA・Cの生活を人生指針に照らして受容し、かつ、人生指針に沿った生活展開を試みる構えと、自我関与的目標の達成や適応改善の見込みをもつこと。換言すればSA・Cの「受け留め」と、目標実現や適応改善への展望形成。

(5) G₇~G₉の要約

本章では、SA・Cの改善一般(維持阻止)の鋭い予測因として強い「全体的適応予想」が指摘された。また強い「力を入れたい事の実現見込」も改善要因であり、今後の教養部生活への明るい展望が築けているか否かが重要であると示唆される。さらに、サークル参加、深い友人の存在な

ど学生生活のインフォーマル局面による自我支持や、7月までに何らかの自我関与的活動を展開してきていることも、2月時SAにプラスの影響を与える。しかし、下宿・寮生活への強い適応は逆にマイナスの影響を与える。フォーマル局面に関しては、「所属満足感」の予測性は弱い、SA・Cの理由や所属不満の理由として「大学の制度・実態」「学部・学科との間の非適応」をあげる場合にはSAは改善しにくく、所属（大学）への不満が意識されている場合（但し、鋭い焦点づけのある場合は除く）には後のSAにマイナスの影響を及ぼすと言えよう。しかし、講義との間の相互適応（魅力を感じついていけ出席度も高いとの自己評価をもつこと）はAへの適応化要因である事が注目される。他方、今後の「出席意欲」は部分的にはあるが、SA・Cに留まる要因ともなる。

なお、G₁～G₃、G₄～G₆においては「人生指針」に関する諸項目で2月時SAに対する予測的関連が度々指摘されてきたが、G₇～G₉では「人生指針」と2月時SAとの関連は全般に弱い。しかし、SA・Cの生活を人生指針に照らして納得できるほど適応化し易く、全体的な人格非適応感を「受け留め」る構えが重要であると示唆された。

Ⅲ-4 7月時における反応・生活空間領域の予測性に関する横断的分析

これまで我々はG₁～G₃・G₄～G₆・G₇～G₉のそれぞれについて、縦断的な比較によってSAの維持・移行、適応化・非適応化の要因を考慮してきたが、本章では、反応・生活空間領域ごとに2月時SAへの関連性を横断的に検討していく。前章までの比較のいずれかで「差」（増大・減少傾向、漸増・減を含む）の指摘された項目・反応をぬき出して、「差」の方向性を表9・表10に示した¹⁸⁾。但し、7月時SAが特定段階の者に設問した項目¹⁹⁾は省略し、合成カテゴリーも「なし+無答」以外省略した。

以下(1)(2)ではG₁～G₃・G₄～G₆・G₇～G₉の三クラスター中の二つ以上で予測性ありと見做された項目・反応をとりあげ、(3)では主な生活空間領域・体制に注目して、横断的に検討を加える。

(1) 三クラスターにわたる予測因

7月時SAの如何を問わず、2月時SAに予測的関連が見出されたのは、五段階評定以外の項目における2反応のみである（表10）。

まず、サークル「参加」者は三クラスターの全てで2月時SAがより肯定的であるという関連が見出される（「非参加」者は逆）。サークル参加による集団や活動自体からの自我支持が、2月時SAにプラスの影響を与えると解される。小野（1982）は、中学・高校におけるクラブ活動の機能を考察する中で、「一般社会に近い複雑な人間関係への発展」「創造活動を生む事」「創造活動を共にすることによる信頼関係・友情がその後の社会化を支える」等を指摘しているが、大学生においても、サークル参加は自我支持機能とともに、人間関係一般のスキルと創造的活動へのスキルを人格に定着させ、その両者を媒介とした＜大学への社会化＞を準備し、その結果、大学における社会（文化）適応感をおしあげる機能をももつのかもしれない。また山田ら（1980）は九州大学卒業生に対する学生生活の回顧的満足感の調査から、大学生活における「集団（特にサークル・クラブ集

表 9 差の見出された五段階評定項目と差の方向

クラスター・ 予測方向・ 比較対 項 目			G ₁ ~ G ₃					G ₄ ~ G ₆					G ₇ ~ G ₉				
			維持：悪化		非適応化			悪化・改善		非適応・適応化			改善：維持		適応化		
			G ₁ : G ₂₊₃	G ₁ : G ₂	G ₁ : G ₃	G ₁₊₂ : G ₃	G ₁₋₃ *	G ₄ : G ₆	G ₄ : G ₅	G ₄₊₅ : G ₆	G ₄₋₆ *	G ₄ : G ₅₊₆	G ₇ : G ₈₊₉	G ₇ : G ₈	G ₈ : G ₉	G ₇ : G ₈₊₉	G ₇₋₉ *
1	所 属	大 学	+	+				+				+					
2	満足感	学 部	+	+													
4		転学(部・科)志向	+	+	+		+										
5	地 域	満 足 感	+	+													
6	購 読	魅 力 度						+		+	+	+					
7	と の	つ いて い け る											+		+		
8	関 係	出 席 度											+		+	+	
9	専 門	準 備 度				+											
11	サークル	関 与 度	+	+	+		+										
12	友 人	友 人 数	+					+		+	+	+					
13	関 係	適 応 感	+					+		+	+	+					
14	下 宿	適 応 感											-		-		
15	・ 寮	交、流 度	+	+	+	+	+										
16	対家族	適 応 感								+	+	+					
17		交 流 度	+	+						+	+	+					
18	生き方	考 える 時 間		+				-		-		+					
19	・	確 立 感	+	+				-	+			+					
20	人生指針	生 活 納 得 感	+	+												+	
21	生 き が い	・ 充 実 感	+	+	+		+		+			+					
22	学 業 へ の	意 欲						+									
23	出 席 意 欲							+				+		-			
24	サークル	関 与 意 欲	+	+				+		+	+	+					
25	交 友 へ の	意 欲						+		+							
26	力を入れたい事の実現見込		-	-									+	+		+	+
27	全 体 的 適 応 予 想												+	+	+	+	+

注) * G₁₋₃, G₄₋₆, G₇₋₉ 欄は、漸増(減)を示す。

＋；2月時S Aへの順機能的関連(より肯定的反応ほど2月時S Aがより肯定的)。

－；2月時S Aへの逆機能的関連(より否定的反応ほど2月時S Aがより肯定的)。

表 10 差の見出された反応と差の方向 —自由記述・選択式項目—

クラスター・ 予測方向・ 比較対 項 目 反 応		G ₁ ~ G ₃					G ₄ ~ G ₆					G ₇ ~ G ₉				
		維持：悪化			非適応化		悪化：改善		非適応・適応化			改善：維持		適応化		
		G ₁ : G ₂₊₃	G ₁ : G ₃	G ₁ : G ₃	G ₁₊₂ : G ₃	G ₁₋₃	G ₄ : G ₆	G ₄ : G ₆	G ₄₊₅ : G ₆	G ₄₋₆	G ₄ : G ₆₊₆	G ₇₊₈ : G ₉	G ₇ : G ₉	G ₇ : G ₉	G ₇₊₈ : G ₉₊₉	G ₇₋₉
		G ₂₊₃	G ₃	G ₃	G ₃	G ₃	G ₆	G ₆	G ₆	G ₆	G ₆	G ₉	G ₉	G ₉	G ₉	G ₉
所属不満の因	学 科 非 適 応												<			
居 住 形 態	下 寮 宿		>	<	>				<	>	>					
サ ー ク ル 参 加		>	>					>			>	>	>			>
友 人 の 質	き が ね ない 人 達 遊 び 友 友 友 し ゃ べ る 程 度							>			>		>		>	>
自我関与的活動 (4~7月)	サークル・クラス 人 生 観・読 書		<	<	<			>			>					
	無 し + 無 し 答 無 し + 無 し 答	<	<		<			<		<	<				<	
やりたかったの に、できなかった事	交 友							>		-	>				>	-
	無 し + 無 し 答							<			<					
やらざるをえな かったこと	出 サークル・クラス 席	<	<	<		<		>			>					
	無 し + 無 し 答								<	<	<		<		<	<
自我関与的活動 (7月)	学 サークル・クラス 人 生 観・読 書	>	>		>			>		>	>					
	無 し + 無 し 答			<	<				<	<						
自我中核的 活動	高 校 の 友 人 大 学 ー フ ー ル						<			<						
	サ ー ク ル 参 加	>			>			>								
今後の 自我関与目標	敬 愛 部 人 生 観・読 書							>			>					
	学 部 学 位・進 級 業						<	>								
卒 後 進 路	就 業・家 事								<	>						
									<	>						

注) * G₁₋₃, G₄₋₆, G₇₋₉ 欄は、増大（減少）傾向、漸増（減）を示す。

不等号は比較対の前後間の大小を示す。

—は有意な χ^2 値をもつが、期待度数 ≤ 0.5 の細胞があることを示す。

団)を媒介とした相互支持・相互啓発」が満足感の理由として高く評価されていると報告し、「大学生活に重要なこと」として「学生会員が何らかのサークルに所属」するのが望まれる旨を特記しているが、＜卒業生＞の＜回顧的＞適応感に限らず、＜在学生＞の＜現時点の＞適応感にとっても、サークル体験とそこでの相互支持・相互啓発が広くSAにプラスの機能を果すといえよう。

次に、4月～7月の自我関与的活動「なし+無答」者は三クラスターの全てにおいて2月時SAがより否定的であるという関連が認められ、7月までに何らかの強い自我関与を伴う活動を明確に展開していることが2月時SAにプラスの影響を及ぼす。入学後の3ヶ月を、強い自我関与的活動をもたぬまま、あるいは、明確化できないままに過してしまうことが、大学生としてのアイデンティティー模索～確立に逆機能を及ぼすと言えよう。

(2) ニクラスターにわたる予測因

ニクラスターにわたって2月時SAに予測的関連を認めうる反応は、12の五段階評定項目への反応(表9)、他の項目での8反応(表10)である。うちG₁～G₃とG₄～G₆のニクラスターにわたるものが計12反応、G₄～G₆とG₇～G₉については6反応、G₁～G₃とG₇～G₉については2反応になる。

まずG₁～G₃とG₄～G₆、即ち、7月時SAがAとBの者双方において予測的関連が認められる12反応を生活空間領域にそって述べると次の通りである。

「大学満足感」が強いことはSA・AとB双方の2月時SAにプラスの機能を果す。インフォーマル局面では、「サークル関与度」と「関与意欲」が強いこと、また「友人数」への自己評価と「友人関係適応感」が肯定的なこと、「対家族交流度」が強いことは、SAがA・B双方の2月時SAにプラスの機能を果す。また強い「生きがい・充実感」もA・B双方にプラスの機能を果している。しかし、居住形態、人生指針・人生観への係わり方は、7月時SAがAとBとでは異なる影響を2月時SAに及ぼす。居住形態では、「下宿」の場合7月時Aの者にはプラスの機能、Bの者にはマイナスの機能が果され、「寮」の場合Aにはマイナス、Bにはプラスの機能が示される。人生指針・人生観に関しても、7月時最大の自我関与的活動として「人生観・読書」を記述することは、7月時SAがAの者にはマイナスの機能、Bの者にはプラスの機能を及ぼす。「人生指針を考える時間」は、それが多いほど、SAがAの者はAを維持することも、逆に、Cに非適応化することもありえ、少ないほどBへの悪化にとどまりやすい(表3参照のこと)が、7月時Bの者ではマイナスの機能のみが見出される。「人生指針確立感」では、確立的なほどAの者はAを維持し易いが、Bの者はA又はCに移行し易い。

要するに、7月時SAがA及びBの者にとって弘前大学入学への強い満足感、サークル・友人・家族といった大学内外のインフォーマルな対人関係領域への広い関与・交流やそこでの強い適応感、全体的な強い生きがい・充実感が、2月時SAに対してプラスの機能を果すが、居住形態や人生指針～生き方確立への強い関心・自我関与・確立度は、2月時SAに対してマイナスの機能も含め多義的な関連をもつことになる。

次にG₄～G₆とG₇～G₉、即ち7月時SAがBとCの双方で予測性をもつ反応をみよう。

「やりたかったができなかった事」を「交友」とすること、「友人の質」が深いことは、7月時

SAがBとC双方の者において2月時SAにプラスの機能を果し、逆に、「やりたくなかったがやらざるをえなかった事」が「なし」及び「なし+無答」はB・C双方でマイナスの機能が認められる。しかし強い「出席意欲」は7月時SAがBの場合は2月時SAにプラスの機能を、Cの場合は部分的にはあるがマイナスの機能を果す。

要するに7月時SAがB及びCの場合は、広い交友ではなく、深い友人関係と友人重視の構えや、義務的拘束的課題への適応や達成の体験が2月時SAにプラスの影響を及ぼす。また、強い今後の出席意欲は7月時Bの者には社会（文化）適応と適応感をもたらしSAにプラスの影響を及ぼすが、Cの者にはマイナスの影響を与える。前章（3）でふれたように、Cの者にとって「今後の出席」とは、全般的にうまくいっていない7月までの生活を適応的に再編するには周皮的で外的で困難でもある課題なのであろう。

$G_1 \sim G_3$ と $G_7 \sim G_9$ 、即ち7月時SA段階が両極（A又はC）の者については次の通りである。

強い「人生指針に照らした生活納得感」は7月時SAがAとC双方において2月時SAに肯定的機能を果す。しかし、「力を入れたい事の実現見込」においては、7月時SAがAとCとでは2月時SAに逆方向の影響が認められる。即ち、強い「見込」をもつ場合、SA・Aの者では2月時SAが悪化し易く、SA・Bの者では改善し易いのである。

要するに、7月時SAがA又はCの場合、人生指針に沿った生活であるという受容・受け留めが2月時SAにプラスに機能していく。他方、今後の自我関与目標に強い実現見込は、Aの場合には7月までの順調な生活展開の故に却ってリアリティーを欠く内容や水準になりやすいために、2月時SAにマイナスの影響を与えるのであろう。これに対して7月時SAがCの場合、強い実現見込は、7月までの順調でなかった生活からの脱出の期待をこめた、具体的展望を伴う行動に裏づけられることを通して、2月時SAにプラスの機能を果すものと思われる。

（3） 主要生活空間領域の予測性

ここでは、項目・反応が指し示す生活空間領域が何であるかに注目し、所属・講義や学業・サークル等の自治的活動・友人関係・下宿や寮・家族・人生観（人生指針）という7つの主要生活空間領域について、各領域との係わりのあり方が、7月時SA段階が異なるとどのような機能を2月時SAに果していくかを概観したい。

i. 大学・学部・学科といった所属との係わりでは、 $G_1 \sim G_3$ の場合は、強い所属満足感一般は「地域満足感」と共に2月時SAにプラスの機能を果している。 $G_4 \sim G_6$ の場合は、「大学満足感」のみがプラスの機能をもつ。これに対して $G_7 \sim G_9$ の場合は、所属満足感の4項目全てが $G_1 \sim G_3$ や $G_4 \sim G_6$ に比べより不満に傾く（表11）とはいえ、 $G_7 \sim G_9$ 内部での満足感の強弱は2月時SAとの関連を認めえない。かわって所属不満の理由としての「学部・科との非適応」が2月時SAにマイナスに機能し、またSA・Cの理由（表8）として「大学の制度・実態」を自由記述したり選択することが2月時SAに関連をもつ²⁰⁾。つまり、 $G_1 \sim G_3$ では所属群全体の、 $G_4 \sim G_6$ では大学への、強い満足感や受容がSAにプラスの機能を及ぼすが、 $G_7 \sim G_9$ においては、「所属満足感」と2月時SAとの関連は弱く、大学の「制度・実態」をSA・Cの理由として原因帰属しないことや、学部・学科との間の非適応感に焦点づけない構え、等が2月時SAにプラスの機能を果すこと

になる。要するに、所属の受容と所属枠のなかの自己を受容できることが $G_1 \sim G_3$, $G_4 \sim G_6$, $G_7 \sim G_9$ の全てにおいて 2 月時 SA にプラスの影響を及ぼしている。

ii. 大学における制度的・フォーマルな社会（文化）適応の中核的課題である〈学業〉のうち、講義出席や単位取得等の比較的周边的で外的な課題との係わりをみると、 $G_1 \sim G_3$ では、それらを「やりたくなかったがやらざるをえなかった事」として認知する構えが 2 月時 SA にマイナスの機能を及ぼすが、 $G_4 \sim G_6$ では、今後への強い「出席意欲」と、学部移籍後の最大の自我関与展望活動として「単位・進級」をあげることが、プラスの機能を果し、 $G_7 \sim G_9$ では、講義への高い「出席度」と「ついていける」との強い評価とがプラスの機能を、今後への強い「出席意欲」がマイナスの機能を果している。すなわち、 $G_1 \sim G_3$ では「出席」の義務的拘束的認知がマイナスの機能を、 $G_4 \sim G_6$ では、今後の出席・単位取得への強い意欲がプラスの機能を示し、 $G_7 \sim G_9$ では、講義という周边的・外的な課題との間でのこれまでの相互適応感がプラスの機能を及ぼすが、今後の強い適応意欲は逆にマイナスの機能を 2 月時 SA に与えていると解される。要するに、講義・単位という外的・周边的課題との係わりは $G_1 \sim G_3$, $G_4 \sim G_6$, $G_7 \sim G_9$ の全てに重要な意味をもつが、7 月時 SA 段階が異なると、係わり方や今後の係わり展望は異なる意味を担うのである²¹⁾。

iii. 次に、学業自体という大学にとって中核的な課題との係わりをみてみよう。 $G_1 \sim G_3$ の場合、これまでの強い「専門準備度」と 7 月時点における「学業」への最大の自我関与とが、2 月時 SA にプラスの機能を果す。 $G_4 \sim G_6$ の場合、強い「講義の魅力度」と今後の「学業への意欲」とがプラスの機能をもつが、学部移籍後の「学業」への最大の自我関与と展望は、逆にマイナスの機能を果す。 $G_7 \sim G_9$ では、講義に「ついていける」との強い自己評価がプラスの機能を果している。要するに、1 年次に既に学業に積極的・自我中核的に係わる構えをもつことが、全てのクラスターにおいて 2 月時 SA にプラスの影響を及ぼしている。

iv. サークル等の自治的活動との係わりは、「サークル参加」が三クラスターの全てで 2 月時 SA にプラスの機能を果すほか、次のようなプラスの機能が認められ、マイナスの機能が示唆される項目・反応は皆無である。 $G_1 \sim G_3$ では、強い「サークル関与度」と今後の「関与意欲」、自我中核的な準拠集団及び活動としての「サークル」が 2 月時 SA にプラスの機能を果し、 $G_4 \sim G_6$ では、強い「関与度」と今後の「関与意欲」、4 月～7 月及び 7 月現在における最大の自我関与的活動としての「サークル・クラス活動」、「やりたくなかったがやらざるをえなかった事」としての「サークル・クラス活動」が、プラスの機能を果している。すなわち、 $G_1 \sim G_3$ ではサークル等の自治活動への積極的関与とサークル活動及び集団の自我中核的定位が、 $G_4 \sim G_6$ では、それへの積極的関与と重視の構えが、それぞれ 2 月時 SA に広汎なプラスの機能を果すが、 $G_7 \sim G_9$ では参加それ自体こそプラスの機能を果すものの、意欲や自我関与・自我中核性は 2 月時 SA との関連に乏しい。要するに、サークル参加は全クラスターに亘って SA に肯定的機能を及ぼすが、生活空間におけるサークル等自治的活動の領域の相対的な自我中核一周辺性²²⁾は、 $G_1 \sim G_3$, $G_4 \sim G_6$ の二セットにおいてのみ 2 月時 SA に強い関連をもつといえる²³⁾。

v. 友人との交流の領域でも全てのクラスターで 2 月時 SA へのプラスの機能が見出された。 $G_1 \sim G_3$ では、「友人数」「友人関係での適応感」「下宿・寮での交流度」でより肯定的反応を与える

ほど、2月時SAはより適応的となるプラスの機能が見出され、G₄~G₆では、「友人数」「適応感」今後の「交友への意欲」でのより肯定的な反応と、深い「友人の質」「やりたかったができなかった事」としての「交友」は、プラスの機能を持ち、G₇~G₉では、深い「友人の質」と「やりたかったができなかった事」としての「交友」とがプラスの機能を果し、SA・Cの理由として「対人関係の問題をあげる事がマイナスの機能を果す。すなわち、G₁~G₃では、多くの友人との幅広い交流とそこでの適応感が、G₄~G₆では、幅広い交流とともに深い質の友人の存在と交友重視の構え、G₇~G₉では、深い質の友人の存在と交友重視の構え、それにSA・Cの理由としての「対人関係」から一部示唆される、対人恐怖等の対人関係に関する病理的徴候がないことが、2月時SAにプラスの機能を果す。要するに、生活空間における交友の領域もSAに強い関連をもつが、7月時SA段階が異なると異なる意味と質を担うと言えよう。

vi. 下宿・寮といった学生としての生活の場との係わりは、G₁~G₃の場合、強い「下宿・寮での交流度」及び「下宿」居住が2月時SAにプラス機能し、「寮」居住がマイナスに機能する。それに対してG₄~G₆では、「下宿」居住がマイナスに機能し、「寮」居住がプラスに機能する。しかしこのニクラスターでは、「下宿・寮適応感」と2月時SAとの関連は見出せない。他方、G₇~G₉では、居住形態は関連に乏しく、「下宿・寮適応感」のみで、それが強い程2月時SAは否定的になるという関連をみせるにとどまる。つまり、G₁~G₃では居住先での密な交流と、自由な生活の享受が、G₄~G₆では密な交流と居住先での諸規制や適応への圧の存在とそれらへの適応体験が、それぞれSAにプラスの機能を果し、G₇~G₉では、SA・Cの学生生活にもかかわらず、下宿・寮に適応できていることから生じるであろう下宿・寮の自我中核化（学業の相対的な周辺化）が2月時SAにマイナスの機能を果すものと解される。なお、G₁~G₃の場合、SA・Aであること（即ち<順調>感）は、規制や適応への圧の多い寮生活では崩れ易いのに対して、G₄~G₆では、<順調>とも<不調>ともつかない学生生活が、寮での規制や適応への圧によって<不調>（SA・C）にと悪化するよりもむしろ、それらへの適応体験によって向上し易く、逆に、下宿生活は、G₁~G₃の場合、その自由な享受が<順調>感を支え易いのに対して、G₄~G₆では、自由さは<順調>とも<不調>ともつかないSAを<順調>にまで押し上げる効果をもちにくいことが示唆されている。

vii. 家族との係わりは、G₁~G₃、G₄~G₆の二セットでのみ関連が認められる。G₁~G₃では、家族との強い「交流度」が、G₄~G₆では強い「適応感」と「交流度」が、それぞれプラスの機能を果す。G₇~G₉では、表11の通りG₁~G₃やG₄~G₆に比して家族との「適応感」「交流度」とも全般に弱いとはいえるが、2月時SAとの関連は認められなかった。つまり、家族との密な交流を中心とする肯定的な家族領域をもつことは、G₁~G₃、G₄~G₆においては2月時SAにプラスの機能を及ぼすが、G₇~G₉では2月時SAとの関連は乏しい。

viii. 人生観~人生指針に関しては、G₁~G₃の場合、「考える時間」「確立感」「生活の納得感」への肯定的評価と、7月時の最大の自我関与活動を「人生観・読書」としないことが、プラスの機能を果す。G₄~G₆では、7月時最大の自我関与活動としての「人生観・読書」、自我中核的活動としての「人生観・世界観の探究」、教養部期における最大の自我関与目標としての「人生観・読書」

表 11 G₇～G₉と他クラスターの比較^{注)}

領域	項目	ア. G ₁ ～ G ₃			イ. G ₄ ～ G ₆			ウ. G ₇ ～ G ₉			比較 (t)	
		n	\bar{x}	SD	n	\bar{x}	SD	n	\bar{x}	SD	ア:ウ	イ:ウ
所属満足感	大学	181	2.22	.78	142	2.59	.85	56	2.86	.95	4.51**	1.90°
	学部	177	2.26	.88	142	2.29	.95	56	2.52	.95	1.87°	—
	学科・課程	181	2.22	.91	133	2.50	.96	53	2.74	.99	3.53**	—
	転学(部科)志向	182	1.70	1.02	142	1.78	1.00	55	2.31	1.22	3.33*	2.83**
家族	適応感	169	1.86	.79	137	2.07	.79	54	2.22	.81	2.85**	—
	交流度	159	2.18	1.10	127	2.42	.86	51	2.73	.93	3.17**	2.11*
人生指針	考える時間	181	2.62	1.09	142	2.83	1.02	56	2.71	1.03	—	—
	確立感	179	2.74	1.13	142	3.21	1.14	56	3.41	1.14	3.87**	—

注) ・他クラスター内部で差が認められ、G₇～G₉内部で差の認められない主要領域についての比較である。

°° P<.10, * P<.05, ** P<.01。

がいずれも2月時SAにプラスに機能し、「人生指針を考える時間」が少ないとの自己評価がプラス機能する。強い「確立感」はプラスに機能するが多いが、G₅・G₆比較では強い程2月時SAはCに悪化し易いマイナスの関連も見出されている。これに対しG₇～G₉では、「確立感」の水準はG₁～G₃に比べ弱いG₇～G₉内部では差が認められず、「考える時間」では他クラスターに比べても、G₇～G₉内部でも差は認められない(表11)。ただ、強い「人生指針に照らした生活の納得感」が2月時SAにプラスの機能を果すのみである²⁴⁾。すなわち、G₁～G₃では、人生指針確立への関心と確立感、それに照らした現在の生活の受容がプラスの機能をもつが、7月時における確立への強い(過度の)自我関与はマイナスの機能をもち、G₄～G₆では、単なる関心や確立感はマイナスに機能し、7月から今後の教養部生活にかけた、確立と深化への強い自我関与の構えや、確立・深化への試行を自我中核的に定位がすることがプラスの機能を果すのに対して、G₇～G₉においては、関心・確立度・探索や深化の構えの強弱は2月時SAへの関連に乏しく、ただ、人生指針に照らしてSA・Cの生活を受け留める強い構えがプラスの機能をもつことになる。要するに、G₁～G₃とG₄～G₆では、人生観・人生指針確立や深化への関心・自我関与が、方向性の別はあれ、2月時SAに強く関連するのに対して、G₇～G₉では確立度・関心や自我関与の強弱は2月時SAとの関連に乏しく、人生観・人生指針がSA・Cを受け留める支えとして機能する場合に2月時SAが改善し易いと言えよう。

ix. 以上の7つの生活空間領域以外に、本章(1)で見たように、4月～7月の自我関与的活動「なし+無答」が全クラスターに亘り2月時SAにマイナスの機能を及ぼしており、また、G₄～G₆では、「やりたかったのにできなかった事」が「なし」及び「なし+無答」、やりたくなかったのにやらざるをえなかった事が「なし」及び「なし+無答」、7月時の自我関与的活動「無答」及び「なし+無答」が、それぞれ2月時SAにマイナスの機能を、G₇～G₉では自我中核的活動「なし」がプラスの機能を及ぼしていることが知られる。要するに、強い自我関与的活動がないことが、アイデンティティ形成を阻害する結果、全てのクラスターにおいて2月時SAにマイナスの機能を果すが、G₇～G₉では自我中核的活動をまだ限定しない、アイデンティティ形成への緩や

かな構えが寧ろ望ましく、 $G_4 \sim G_6$ では、義務的拘束的感情を伴いつつも外的課題に自我関与し達成・適応体験をえたり、当初の強い自我関与展望対象が全て達成されたとの認知をもたず、7月時現在から7月以降にかけてそれを追求しようとの構えをもつことが、2月時SAにプラスに機能するものと考えられる。

x. さらに、「学業」「出席」「サークル関与」「交友」という、今後の大学生活のフォーマル・インフォーマルな主要領域に対する意欲は、表10にみるように、 $G_4 \sim G_6$ では全てプラスに機能しており、それに対して、 $G_1 \sim G_3$ と $G_7 \sim G_9$ では一部で2月時SAとの関連が見出されるにとどまる点や、「力を入れたい活動の実現見込」「全体的適応予想」といった、今後の人格適応への展望をもてることが、 $G_7 \sim G_9$ においてのみ2月時SAにプラスの機能を果す点も、興味深い問題であろう。要するに、今後の主要領域への強い意欲は、特に $G_4 \sim G_6$ 、即ち、7月時SAが「どちらともいえない」者にとっては、その後のSAを改善する機能をもち、今後の生活への適応的展望は、特に $G_7 \sim G_9$ 、即ち、7月時に全体的な非適応を感じているSA・Cの者にとって、その後のSAを改善する機能をもつのである。

Ⅳ 総括と展望

入試制度改訂後における大学新生の1年間にわたる適応過程を把える追跡調査の資料から、夏休暇直前7月時の総括的適応感(SA)が同段階の者(「適応」—A段階; $G_1 \sim G_3$ 、「中間的」—B段階; $G_4 \sim G_6$ 、「非適応」—C段階; $G_7 \sim G_9$)が1年次終了直前2月時のSA段階を改善・維持・悪化させることと、A段階に移行(適応化)又はC段階に移行(非適応化)させていくことに関わる7月時の反応、即ち2月時SAの予測因が探索され、それらによって、改善・維持・悪化と適応化・非適応化に関連する7月時点の生活空間体制とそのSAに及ぼす機能とが考察された(Ⅲ-1章(1)~(4)、Ⅲ-2章(1)~(3)、Ⅲ-3章(1)~(4))。考察の概略を、生活(空間)領域の差異に基き配列して示すと、表12・13の通りである。表中では、“より肯定的な2月時SA段階になりやすさ”の7月時要因($G_1 \sim G_3$, G_5 : G_6 では悪化阻止要因、 G_4 : G_5 , $G_7 \sim G_9$ では改善要因)として記述したが、記述内容を逆にすれば直ちに、より否定的なSA段階への悪化・改善阻止要因の特徴となる。

表12・13の概観からも明らかなように、7月時SAがAである $G_1 \sim G_3$ においては、現所属にいることへの満足感と受容やサークル・交友等のインフォーマル局面への積極的関与、7月までの強い自我関与を伴う活動の展開と強い人生指針確立感がAの維持要因となり、人生指針確立への強い関心や自我関与は逆に悪化要因として働くことが多い(Ⅲ-1章(5))。7月時SAがBである $G_4 \sim G_6$ においては、友人や家族との密で適応的な関係や、7月までの強い自我関与的活動の展開がAへの改善とCへの悪化阻止要因となり、講義・学業といったフォーマル局面への積極的構えやサークル関与などは改善要因となるが、それが弱くとも悪化要因にはならず、人生指針確立への単なる関心や確立感は強い程Aへの改善かCへの悪化が生じ易く、それへの強い自我関与や自我中核的な定位が改善要因となる(Ⅲ-2章(4))。7月時SAがCである $G_7 \sim G_9$ においては、7月以降の適

表 12 2月時 SA の維持・悪化・改善に関連する

7月時 S A (クラスター)		S A・A; 「適応」 (G ₁ ~G ₃)			S A・B; 「中
比較対		G ₁ : G ₂ +G ₃	G ₁ : G ₂	G ₁ : G ₃	G ₅ : G ₆
記述の方向		Aの全般的な悪化阻止要因	Bへの悪化阻止要因	Cへの悪化阻止要因	Cへの悪化阻止要因
該当章・節		Ⅲ-1, (1)	Ⅲ-1, (2)	Ⅲ-1, (3)	Ⅲ-2, (1)
所属卒との関係		・＜弘前＞大学入学や所属卒への満足感と受容。			・現所属の受容。
生活空間体制全般		・4～7月の強い自我関与的活動の展開と、それによる自我支持・充実感。 ・[全般的なポジティブ感情に基くS A・Aであること。]			・強い充実感。
フォーマル局面		・7月時の学業への強い自我関与。但し、出席に負担・拘束感を感じないこと。			
インフォーマル局面		・サークル集団・活動の自我中核性と自我支持。	・サークルへの強い関与・関与意欲・自我支持。	・サークルへの強い関与と自我支持。	・高校期の友人を自我中核的準拠集団としないこと。
		・多くの友人との円滑な関係による自我支持			
		・「アパート・間借り」ではないこと（他律的生活規制とそれへの適応）。	・居住先での密な人間関係と自我支持。	・下宿・寮での密な交流と下宿生活の享受。 (但し、寮生は悪化し易い。)	
		・家族との密な関係とそれによる自我支持。			
生き方・人生指針		・確立的な人生指針とそれに基づく生活展開、充実感・納得感。	・人生指針探索への強い関心と、確立過程の進行。	・人生指針探索への強い自我関与がないこと（強いと却って危機に）。	・人生指針探索への弱い関心と弱い確立感。
S Aの質・S A改善方法		・全般的なポジティブ感情によるS A・Aであり、「不満・悩みがない」というネガティブな理由によるS A・Aではないこと。			・「不満・悩みなし」という理由によるS A・Aではないこと。
展 望	教養部	・自我関与目標活動の実現に過大な期待をもたぬこと。			
	学部				・学業に最も自我関与するとの構えが弱いこと。 教養部のモラトリアムの定位が弱いこと。
	卒後				

注) 1. 記述内容の方向を逆にすれば、悪化阻止要因は G₁~G₃ では悪化要因・G₄~G₆ ではBの維持要因、改
 2. [] を付した事項は、本文の該当章・節においては独立の項をたてず、他項に含めて考察された。

7 月時の生活空間体制

間」 ($G_4 \sim G_6$)		SA・C ; 「非適応」 ($G_7 \sim G_9$)		
$G_4 : G_5$		$G_7 + G_8 : G_9$	$G_7 : G_9$	$G_8 : G_9$
A への改善要因	Cの全般的な改善要因	A への改善要因		B への改善要因
Ⅲ-2, (2)	Ⅲ-3, (1)	Ⅲ-3, (2)		Ⅲ-3, (3)
<ul style="list-style-type: none"> 大学への満足感。 				<ul style="list-style-type: none"> 大学の制度・学部(科)への不満や非適応感を強く意識しないこと。
<ul style="list-style-type: none"> 4～7月の強い自我関与活動の展開・それによる自我支持・充実感。但し、関与目標対象全てが達成されたと認知しないこと。 		<ul style="list-style-type: none"> 自我中核的活動を限定しない探索的態度。 義務的・拘束的課題への適応・達成の体験。 		
<ul style="list-style-type: none"> 講義による自我支持と講義～学業への積極的構え。 		<ul style="list-style-type: none"> 講義への適応感と、それによる社会(文化)適応感。 		<ul style="list-style-type: none"> 出席への強い構えをもたぬこと。
<ul style="list-style-type: none"> サークルへの強い関与と自我支持。但し、サークルへの係わりが義務的拘束的であっても可。 多くの友人との円滑な関係と深い友人の存在。 交友重視の構え。 	<ul style="list-style-type: none"> サークル参加による自我支持。 	<ul style="list-style-type: none"> きがねない友人の存在、それによる自我支持。 下宿・寮での強い適応がないこと。 		
<ul style="list-style-type: none"> 確立的な人生指針と人生・世界観重視の構え。但し、探索や確立をSA改善の方法としては意識しないこと。 				
	<ul style="list-style-type: none"> ＜マクロ＞な環境条件への不適応感によるSA・Cではないこと。 	<ul style="list-style-type: none"> 環境調整による適応改善への構え。 		<ul style="list-style-type: none"> 「大学の制度・実態によるSA・Cではないこと。」
	<ul style="list-style-type: none"> 自我関与目標活動の実現と適応改善への展望。 			<ul style="list-style-type: none"> 適応改善への展望。
<ul style="list-style-type: none"> 単位・進級重視(大学文化への適応重視、あるいは、スムーズな卒業への構え)。 				

善要因は $G_4 \sim G_6$ でBの維持要因・ $G_7 \sim G_9$ で改善阻止要因と、夫々読みかえることができる。

表 13 「非適応」化・「適応」化要因

7 月 時 S A (クラスター)		S A・A (G ₁ ~G ₃)		S A・B (G ₄ ~G ₆)		S A・C (G ₇ ~G ₉)	
記 述 の 方 向		非 適 応 化 阻 止 要 因 ¹		適 応 化 要 因			
該 当 章 ・ 節		Ⅲ-1, (4)		Ⅲ-2, (3)		Ⅲ-3, (4)	
所 属 卒 と の 関 係		・ 現所属の受容。				・ (大学の制度・実態による S A・C。但し、その機能は多義的。)	
生 活 空 間 体 制 全 般		・ 4~7 月の強い自我関与的活動の展開と、それによる自我支持・充実感。		<ul style="list-style-type: none"> ・ 4~7 月の強い自我関与的活動の展開、及び、現在も存在すること。それによる自我支持。 ・ 4~7 月での同左、及び現在での同左。それに伴う充実感。但し、関与目標活動の全てが達成されたとの認知をもたぬこと。 		<ul style="list-style-type: none"> ・ 4~7 月での強い自我関与的活動、及び、義務的拘束的活動の展開と、それによる自我支持・課題への適応。 ・ [S A・C の受け] 留め。 	
フ ォ ー マ ル 局 面		・ 学業・出席への積極的構え。		<ul style="list-style-type: none"> ・ 講義による自我支持。 ・ 講義による自我支持と出席への積極的構え。 		・ 出席・講義への適応感。	
イ ン フ ォ ー マ ル 局 面		<ul style="list-style-type: none"> ・ サークルへの強い関与・自我中核的的定位と自我支持。 ・ 下宿・寮での密な人間関係と下宿生活の享受。但し、寮生は非適応化し易い。 		<ul style="list-style-type: none"> ・ サークルへの強い関与と自我支持。義務的拘束的係わりでも可。 ・ 交友重視の構えと、深い友人を含む広い円滑な交友。但し、「大学での友人」を自我中核的準拠集団とする尚早な構えがないこと。 ・ 寮居住であり、下宿・間借り生活ではないこと。 ・ 家族との密で円滑な関係と自我支持。 		<ul style="list-style-type: none"> ・ サークル参加による自我支持。 ・ 深い友人の存在と円滑な対人関係。 ・ 下宿・寮での強い適応がないこと。 	
生 き 方 人 生 指 針		・ 人生指針探索への過度の自我関与がないこと。		<ul style="list-style-type: none"> ・ 人生指針探索への過剰な関心がないこと。 ・ 確立的な人生指針と人生指針探索への強い構え。 		<ul style="list-style-type: none"> ・ S A・C の受け留めと、目標実現~適応改善への展望 	
S A の 質 S A 改 善 方 法		・ 「不満・悩みなし」というネガティブな理由による S A・A ではないこと。		・ S A・B からの改善方法がまだ明確化できていないか、性急な改善をはからない余裕の存在。(生活・生活空間の着実な体制化への構え。)		<ul style="list-style-type: none"> ・ 大学の制度・実態による S A・C。但しその機能は多義的。 ・ [S A・C をめぐる環境への原因帰属。] 	
展 望	教 養 部						
	学 部						
卒 後				<ul style="list-style-type: none"> ・ 家業・家事志向でないこと。 ・ 卒 後 就 職 へ の 志 向 			

注) 1. 「非適応化阻止」要因の記述は内容の方向を逆にすれば「非適応化」要因となる。該当章・節では「非適応化要因」を考察。

2. [] は本文の該当章節においては独立の項をたてず、他項に含めて考察された。

応改善に明るい展望が築けていることや、サークル参加、深い友人の存在といったインフォーマル局面からの自我支持、7月までの講義との間の相互適応感、7月までの強い自我関与的活動の展開などが改善要因となり、SA・Cの生活を受け留める構えも改善要因となる(Ⅲ-3章(5))。

7月時SA段階の別を問わず、入学以降7月までに何らかの強い自我関与を伴う活動を展開していることは2月時SAにプラスの機能を果し、大学生としてのアイデンティティ形成に好ましい影響を与えるものと解される。また、サークル参加も7月時SA段階の別を問わず、プラスの機能を果し、サークル体験、なかんづく、その中での人間関係、創造的体験へのスキル定着を媒介とする大学への社会化の進行、相互支持と相互啓発の体験などが、2月時SAに好ましい影響を与えると考えられた(Ⅲ-4章(1))。7月時SA段階がA・B・Cのうちいずれか2つについて2月時SAの予測因となる反応は多く、それについては、Ⅲ-4章(2)節でまとめられたが、内容が多岐にわたるのでここでは繰り返さない。

Ⅲ-4章(3)節では、主要な生活空間領域に注目し、そこでのいかなる係わり方が2月時SAにいかなる影響を及ぼすかという観点からの横断的分析が試みられた。

先ずフォーマル局面との係わりとして、第一に、大学・学部・学科というフォーマルな所属枠との係わりにおいては、所属全体の満足感や受容が $G_1 \sim G_3$ では広く2月時SAにプラスに機能するが、 $G_4 \sim G_6$ では大学満足感のみでプラスの機能が認められ、 $G_7 \sim G_9$ では、単なる満足感や受容ではなく、大学の制度・実態にSA・Cの理由としての原因帰属をしないことや、学部・科との間の非適応に強く焦点づけない構えが2月時SAにプラスの機能を果す。第二に講義出席や単位といった外的・周辺的課題との肯定的・積極的な係わりは、 $G_1 \sim G_3$ では2月時SAとの関連はうすく、 $G_4 \sim G_6$ では、今後への強い意欲が2月時SAにプラスに機能し、 $G_7 \sim G_9$ では、7月までの講義との間の相互適応感がプラスに機能していく。第三に、学業自体との係わりは、＜教養部期＞という時間次元に関する限りでは、7月時SA段階の別をとわず、肯定的・積極的な係わりが2月時SAにプラスに機能していく。なお教官との関係(交流度)は2月時SAとの関連は全く見出せなかった。

大学生生活のインフォーマル局面についてみると、まず、サークル等との係わりは、参加それ自体こそ、前述のように、7月時SA段階の別を問わず広くプラスの機能をもつものの、生活空間構造におけるサークル等自治活動の自我中核一周辺性の如何は $G_7 \sim G_9$ では2月時SAとの関連に乏しく、 $G_1 \sim G_3$ ・ $G_4 \sim G_6$ でプラスの機能が及ぼされていく。次に、交友の領域では、 $G_1 \sim G_3$ においては、広い交流とそこでの適応感が、 $G_4 \sim G_6$ では、広い交流と深い友人の存在及び交友重視の構えが、 $G_7 \sim G_9$ では深い友人の存在と交友重視の構えが、それぞれ2月時SAにプラスの機能を果していく。更に、下宿・寮という生活の場のあり方も7月時SA段階の別を問わず、2月時SAとの関連が認められるが、関連の方向やその意味は多様であった。また、家族との肯定的な係わりは、 $G_1 \sim G_3$ と $G_4 \sim G_6$ においてのみ2月時SAにプラス機能していく。

生活体制と生活空間体制の統合原理としての人生観・人生指針に関しては、 $G_1 \sim G_3$ と $G_4 \sim G_6$ において、その確立や深化への関心・自我関与が2月時SAに強く関連するのに対して、 $G_7 \sim G_9$ では関連に乏しいものの、人生指針に照らしてSA・Cの生活を受け留められることが2月時SAに

プラスに機能していく。

これらに加えて、7月以降の主要な生活領域への強い意欲は特に $G_4 \sim G_6$ でプラスの機能を持ち、7月以降の適応展望をもてることが $G_7 \sim G_9$ でのみプラスの機能を果たす。

以上要するに、多くの反応・生活空間領域（体制）は7月時のSA段階が異なれば異なる機能を2月時SAに果していく。もちろん、従来の大学生の適応やアイデンティティに関する諸論に指摘されているように、大学生のフォーマルな適応課題としての学業や講義、所属への満足感や受容、青年期の発達課題としての人生指針確立、現代学生に特徴的な自我関与領域としてしばしば言及²⁵⁾されるサークルや交友等の諸領域との係わりが、後の時点での適応感に強い影響を及ぼしているが、それにもまして、この一連の研究から、SA段階に応じてそれら領域との係わりのあり方が異なる影響を及ぼしていくと示唆されたのが重要であろう。

さて、「大学新入生における適応状況と適応過程」を追求してきた本プロジェクトは、昭和52年以来55年度まで、各入学年度の新入生をコホートとする1年間の追跡調査として実施されてきたが、それにとどまらず、2年次以降に至る長期的追跡のプロジェクトも併行して展開されている。54年度入学生に対する長期的追跡の成果のごく一部は既に豊嶋（1982b）、豊嶋・清ほか（1982）によって発表されているが、その詳細かつ包括的検討は「大学生の適応構造と適応過程の長期的追跡」として本誌に報告していく予定である。それに加えて、新入試制度定着後の新入生に対する長期的追跡調査や、さらに、かかる大数的研究と相補的關係をもつべき事例研究との結合もまた、その方法論的検討と共に要請されて来よう。それらについても稿を改めて報告することにしたい。

註

- 1) 本論の対象者（昭和54年度入学者）の4年時SAの1年時点における予測因については日本社会心理学会第23回大会で（豊嶋ほか 1982b, 清ほか 1982）、また、同じ対象者の1年次から4年次に至る適応の構造については第20回全国大学保健管理研究集会で（豊嶋 1982b）、既に報告している。
- 2) II報（豊嶋ほか 1980）I章、III報（豊嶋ほか 1981）I章に詳しい。
- 3) 「非常にうまくいった」と「どちらかというところ……」がA、「どちらともいえない」がB、「どちらかというところうまくいかなかった」と「非常に……」がCとされた。
- 4) この一連の研究では χ^2 検定におけるYatesの補正は細胞度数5以下の場合に適用（肥田野ほか 1961, 76頁）。なお期待度数が極く小さくともFisherの直接確率法には拠らず χ^2 検定を使用。前者が片側検定と見做しうるからである（Everitt, 山内ほか訳 1980, 18頁）。
- 5) (非)適応化要因を求める規準は前報（IV報）に比べ検出力が高くなっている。
- 6) $G_1 \cdot G_2 \cdot G_3$, $G_4 \cdot G_5 \cdot G_6$, $G_7 \cdot G_8 \cdot G_9$ は、それぞれ2月時SA段階の高低に基く順序尺度と解されるからBatholomew法を使用。
- 7) この規準は、五段階評定項目での漸増（減）を捨てる規準と整合性をもたせるために導入した。なお、この規準によってはじめて捨てることのできるものは、 $G_4 \sim G_6$ の3反応2合成カテゴリーのみ。
- 8) 「友人の質」を順序尺度と見なし、「親友あり」に1点、「しゃべる程度」に4点を与えると、 G_4 は $Mdn = 1.95$, G_5 $Mdn = 2.19$ 。中央値検定で有意（ $\chi^2 = 5.21^*$ ）。 G_4 がより深い友人をもつ。
- 9) もちろん直接確率でも $P < .10$ ($p = .057$)。
- 10) 中央値でも確認できる。 $G_4 : G_5$ は註8)の通り。 G_5 ($Mdn = 2.25$) : G_4 では $\chi^2 = 5.04^*$ 、当然ながら $G_5 + G_6$ ($Mdn = 2.21$) : G_4 では $\chi^2 = 5.90^*$ で有意。 G_4 から G_6 での中央値漸増も観察できる。
- 11) SAがAの者にとっては寮居住は逆に非適応要因となる（III-1(3)(4)）。

- 12) もちろん直接確率法でも有意 ($P=.043$)。
- 13) 黒田ら (1976) は「留年」という大学における社会 (文化) 非適応に対して、「職業志向が抑制的効果をもつ」(8頁) ことを見出しているが、本研究では少なくとも7月時SAがBの者にとって、2月時の人格非適応にも抑制的効果がある事が示されたことになる。かかる効果は、入学時のSAがBやCの者の7月時SAや、入学時SAがAとCの者の2月時SAに対しても (IV報 豊嶋ほか 1982a), 入学時SAがAの者の卒業年次SAに対しても (豊嶋ほか 1982b), 7月時SA・Bの者の卒業年次SAに対しても (清ほか 1982), 夫々確認されている。
- 14) ここでは「力を入れたい事の実現見込」は2月時SAにプラスの影響を与えているが、SAがAの者 ($G_1 \sim G_3$) ではマイナスの影響が見出されている (III-1 (1)(2))。
- 15) 直接確率は $P=.040$ 。
- 16) 但し「友人の質」への反応を全体としてみると差は認められない (中央値検定で $P>.10$)。
- 17) もちろん直接確率は有意 ($P=.027$)。
- 18) 五段階評定項目では全ての比較対で「差」が見出せなかったものは、「学科満足感」(表2の項目番号3) と「対教官交流度」(同10) の2項目のみ。
- 19) 「SA・A」又は「Cの理由」(共に自由記述と選択式の2項目によって設問)、「適応改善の方法」の計5項目。
- 20) $G_7 \sim G_9$ にとっての「所属」の意味の詳細は、III-3 (1)③項, (3)②項, (4)⑥項, (5)を参照されたい。
- 21) これは、授業・出席等の「外的・社会的課題」との係わりが大学生生活前半の同一性問題に関連する基礎的要因のひとつである、という藤原 (1981, 199頁) の仮説を支持している。
- 22) 「強い意欲を示すこと」や「力を入れること」は直ちにその対象領域の自我中核性を意味しない。しかし、彼の生活空間構造において相対的により中核的位置を占めることにはなる。
- 23) $G_7 \sim G_9$ におけるサークル参加者 (26名) 中、サークル集団と活動自体を自我中核的に定位する者は夫々1名 (3.8%), 5名 (19.2%) であるが、 $G_1 \sim G_3$ ・ $G_4 \sim G_6$ のそれ (夫々, 112名中16名と23名, 89名中11名と8名) との間で有意な差はない ($P>.10$)。
- 24) 五段階評定項目以外での人生観に関連する反応の比率でも、 $G_7 \sim G_9$ は $G_1 \sim G_3$ や $G_4 \sim G_6$ と比べ差がないものが殆んど。但し4月～7月の最大の自我関与的活動「人生観・読書」は $G_7 \sim G_9$ で計8名 (14.3%), $G_1 \sim G_3$ では計13名 (7.1%), $G_4 \sim G_6$ で計23名 (7.1%) であり、 $G_1 \sim G_3$, $G_4 \sim G_6$ に比べ $G_7 \sim G_9$ が高率な傾向 (夫々 $\chi^2=2.72, 3.29$, 共に $P<.10$) をもつ。
- 25) 例えば、石井 (1976), 宮川 (1977)。

文 献

1. Everitt, B.S. 1977, "The Analysis of Contingency Tables" (山内監訳 1980, 「質的データの解析」新曜社)。
2. 藤原正紀 1981, 学生生活と同一性, 遠藤編「アイデンティティの心理学」ナカニシヤ出版, 184-214。
3. 細木照敏 1980, 大学生活に不適応な学生たち, 教育と医学 28(10), 60-66。
4. 石井完一郎 1976, 現代学生 of 精神構造について—その指導拠点を求めて—, 厚生補導 126, 12-22。
5. 肥田野 直・瀬谷正敏・大川信明 1961, 「心理教育統計学」培風館。
6. 黒田正典・細江達郎 1976, 東北大学における留年の一考察, 東北大学学生相談所紀要 3, 1-8。
7. 宮川知彰 1977, 学生の「不適応」について, 厚生補導 131, 2-14。
8. 小野直広 1982, 社会化—その屈折, 原谷他編「青春からの出発—人間解放への青年心理学」アカデミア出版会, 81-96。
9. 清 俊夫・豊嶋秋彦・芳野晴男 1982, 大学生の適応に関する基礎的研究・7-(2) 4年時適応感に関連する教養部終了時点要因, 日本社会心理学会第23回大会発表論文集, 83-84。
10. 豊嶋秋彦 1980, 入試制度の変容前後における大学新入生の適応状況, 全国学生相談研究会第13回シンポジウム報告書, 11-14。

11. 同上 1982 a, 大学生の適応の予測因—1 年次終了時点の適応状況の 7 月時点における予測因の探索, 第 20 回全国大学保健管理研究集会東北地方集会報告書, 21-23.
12. 同上 1982 b, 4 年次学生における入学時～4 年時点の適応の構造, 第 20 回全国大学保健管理研究集会報告書, 印刷中.
13. 豊嶋秋彦・清俊 夫・芳野晴男 1980, 大学新入生における適応状況と適応過程 (II) —共通出席者における適応の状況と適応の予測因をめぐって—, 弘前大学保健管理概要 5 —別冊, 1-51.
14. 同上 1981, 大学新入生における適応状況と適応過程 (III) —入試制度改訂に伴う適応の変容と同化の諸相—, 弘前大学保健管理概要 5, 1-41.
15. 同上 1982 a, 大学新入生における適応状況と適応過程 (IV) —入試制度改訂後における 4 月から 7・2 月に至る適応過程の予測因, 弘前大学保健管理概要 6, 1-50.
16. 同上 1982 b, 大学生の適応に関する基礎的研究・7-(1) 4 年時適応感に関連する入学時点における要因, 日本社会心理学会第 23 回大会発表論文集 81-82.
17. Toyoshima, A., Sei, T., & Yoshino, H. 1981, A study on predictors of adjustment process in Japanese university freshmen, *Tohoku Psychologica Folia* 40, 51-65.
18. 土川隆史・丸井文男 1978, 大学生の留年の実態とその要因の分析, 「大学生の留年の実態とその要因の分析および指導法に関する研究」名古屋大学学生相談室, 1-27.
19. 山田裕章・冷川昭子・峰松 修 1980, 学生生活の研究 1. 卒業後から見た大学生生活の満足度, 健康科学 2, 九州大学健康科学センター, 155-161.
20. 芳野晴男・清 俊夫・豊嶋秋彦 1981, 大学生の適応に関する基礎的研究, 6-(2) 新入生における 7 月～2 月の適応過程を中心に, 日本心理学会第 45 回大会発表論文集, 455.

付-資 料：7月調査質問紙

____年度入学	____学部	____学科（____専攻・課程）
学籍番号____（男・女）		
現在の住まい（自宅・アパート・間借・下宿・寮）		

I. 入学後の生活について

1. 1-1 弘前大学に入学したことをあなたは今、どう思っていますか。

非常に満足	どちらかという満足	どちらともいえない	どちらかという不満	非常に不満
-------	-----------	-----------	-----------	-------
- 1-2 今の学部に入ったことについては、

非常に満足	どちらともいえない	非常に不満
-------	-----------	-------
- 1-3 今の学科（専攻・課程）については、

非常に満足	どちらともいえない	非常に不満
-------	-----------	-------
- 1-4 不満がある場合、どういう点で不満なのですか。
 ()
2. 現在、他大学、学部・学科に再受験（転学部・科）したいと思いませんか。

全くそうは思わない	どちらともいえない	是非そうしたい
-----------	-----------	---------
3. 弘前という街にいることについては、

非常に満足	どちらともいえない	非常に不満
-------	-----------	-------
4. 講義や勉学について、入学してからこれまで、
 - 4-1 教養部での講義を全体として評価すると、

非常に面白い	どちらともいえない	非常につまらない
--------	-----------	----------
 - 4-2 教養部での講義を全体として評価すると、

十分についていける	どちらともいえない	ついていけない
-----------	-----------	---------
 - 4-3 出席は、全体としてどうでしたか。

とにかく全部出席した	適度に	たまにしか出席しなかった
------------	-----	--------------
 - 4-4 専門の研究や準備をこれまで

十分やった	どちらともいえない	全く(ほとんど)やらなかった
-------	-----------	----------------
 - 4-5 教官との交流は、

非常にある	どちらともいえない	全くない
-------	-----------	------
5. 学生間の交流について
 - 5-1 サークル・クラブ活動は、

やっていない	→	積極的にやっている	どちらともいえない	消極的
やっている				
 - 5-2 大学での友人は、

多い	どちらともいえない	全くいない
----	-----------	-------

- 5-3 友人関係は全体としてうまくいっていますか。 非常にうまくいっている どちらともいえない 非常にうまくいっていない

6-1 下宿・(アパート)・寮での生活は、
非常にうまく
生活は、
いっている
どちらとも
いえない
非常にうまく
いっていない

7. 7-1 家族との関係はどうですか。 非常にうまく どちらとも 非常にうまく
いい いえない いい

- 7-2 家族との関係はどうですか。 非常に密 どちらともいえない 非常に疎

8-1 これまで、そうした指針について、考える時間がとれましたか。

充分とれた どちらともいえない 金とれたなかった

- 8—2　そうした指針をすでに作り　　そう思う　　どちらとも　　そうは思わない
　　　　　上げていますか。　　　はつきりある　　いえない　　非常に不明確

- 8-3 そうした指針[↓]にてらして
みると、今の生活は、納
得のいくものですか。
- 非 常 に ど ち ら と も 全 く そ う は
そ う 思 う い え な い 思 わ な い
- _____

(3)

— 39 —

- ① 家族との関係 ② 高校のころの友人関係 ③ 大学での友人関係
④ サークル・クラブでの友人関係 ⑤ 尊敬する人物や師との関係
⑥ とくになし ⑦ その他()

13-2 その人間関係での、最もかけがえのない活動は何ですか。(実際にそれをやれていなくともかまいません。)

- ① 勉学・研究活動 ② サークル・クラブ活動そのもの ③ 趣味の活動
④ 遊び・リクリエーション ⑤ 人生観・世界観の確立
⑥ 対人関係そのもの ⑦ とくになし
⑧ その他()

14. あなたは、これまでの生活に全体として、「生きがい」や「充実感」を感じていますか。

非常に感じる どちらともいえない 非常に感じない

15. 要するに、これまでの学生生活は、

15-1 非常にうまく どちらかという どちらとも どちらかという 非常にうまく
 いうている うまくいうている いえない うまくいうていない いうていない

15-2 どういう点でうまくいうているのですか。

()

15-2 付

あなたのうまくいうているわけを、下の
事項 ①～⑥に分類するとしたら、どれに
関係しますか。あてはまるもの全ての番号
を記入して下さい。

(,)

15-3 どういう点でうまくいうていないのですか。

()

15-3 付

あなたのうまくいうていないわけを、下の
事項 ①～⑥に分類するとしたら、どれに
関係しますか。あてはまるもの全ての番号
を記入して下さい。

()

15-4 それでは、どうすればうまくいくようになると思いますか。

()

事項

- ① 弘前の街・風土・下宿・寮など大学外の環境条件に関すること
② 大学内の環境や大学自体の諸条件に関すること
③ 学業に関すること
④ 生活のリズム・余裕・時間配分に関すること
⑤ 対人関係に関すること
⑥ 家族や旧友・故郷との関係に関すること

Ⅱ. 今後の学生生活について

16. これからの教養部生活では、

- 16-1 学業に対する意欲は、
 十分ある どちらともいえない な い
- 16-2 講義への出席意欲は、
 十分ある どちらともいえない な い
- 16-3 サークル・クラブ活動に対する意欲は、
 十分ある どちらともいえない な い
- 16-4 交友関係に対する意欲は、
 十分ある どちらともいえない な い

17. 今後の教養部生活で、特に、一番力を入れたいことはなんですか。

()

↓
 17-付 それを実際にやれる見込みはどうか
 十分見込みがある どちらともいえない ほとんどない

18. 今後のあなたの生活を全体として予想すると、
 非常にうまくいくだろう どちらともいえない 非常にうまくいかないだろう

↓
 18-付 どういう点ですか。

()

19. 学部移籍後、とくに、一番力を入れたいことは何ですか。

()

20. 大学卒業後は

① 大学院に進みたい ② 就職したい (志望就職 _____)



③ 家業・家事 ④ まだ考えていない・未定

20-付 大学院修了後は、どんな職業につきたいですか。

()